

少女蝶々の箱

水島一輝



プロローグ

「おはよう！」

朝、そう言ってスライド式のドアを開けて病室に入ってきたのは、看護師の四季野牡丹。まだ若い。薄ピンクのナース服で、朝食をトレーに乗せて運んできた。病室はベッドが四つあり、使われているベッドは窓際の一つだけ。少年が一人ベッドの上で窓から差し込む光りを浴びていた。病室のカーテンは少年の所だけ開いていた。

「薫君。今日はもう起きてたんだ。はい、朝ご飯」

「おはようございます。牡丹さん。今日はなんか目が覚めてしまって……。本当は牡丹さんに起こしてもらえるのが一番なんですけど。今日は……」

薫は、ふっと布団に目を落とす。少し残念な表情をしているのかなと、牡丹は薫の表情を見た。照れたように口角が上がったやわらかい笑顔だった。こんな表情はいつも見せないのにと、牡丹は頭の中の記憶を思い返した。彼の担当になって一ヶ月半。初めて見た表情だった。

「あら、嬉しいこと言ってくれるわね。私、ドアの所からもう一度入り直そうか。寝直す？」

「今日は、もう大丈夫です」

「そう」

薫の返答を聞いて、牡丹は笑顔になった。

「牡丹さん。俺なんかより、起こしてあげたい人はいないんですか？」

薫が聞いた。

「何、その聞き方。さも彼氏はいないみたいに……」

これも仕事よ、と大人事情は話さないことにする。

「実際は、いないんですよね」

「――ええ、いないわよ。それじゃ、薫君が私の彼氏になってくれる？」

「遠慮しておきます」

薫は即答した。今のは心にきたかもと牡丹は軽くショックを受けていた。表情に出ていないか、……いや苦笑いしていた。

「薫君は年上に魅力を感じたりはしないの？」

私は朝っぱらから、たかが高校生に何をそんなにムキになっているのだろうか。

「んー、そういうのはちょっと良くわからないんです。男が女性を好きになることはわかるんですけど。それ以上のことは、よくわからないです」

「そりゃそうだね。わからないものはわからない。大いに結構よ！ でもね、男と女はお互いに想いが通じちゃうと、天に舞うように二人は燃え上がっちゃうこともあるのよ」

薫は最後の方を聞いていない様子だった。ずっと自分の手元を気にしている。両手で昆虫を捕まえて、中の虫を潰さないように丸みを作っていた。牡丹が来る前から薫はそうしていたようで、牡丹はそれを気にしていた。しかし、病室の窓は開いてないので虫など入ってこない。窓は開けられないように固定されているのでなおさらだ。ガラスが割られている様子もない。昨日、通用口かどこからか迷い込んでしまったのだろうかと思っていた。

「さあ、朝食にしよう」

その両手のことを聞くべきだっただろうか。そう思いながら、ベッドをコの字にまたぐテーブルを薫のそばまでスライドさせた。

「あの、牡丹さん」

「何？」

「変なこと聞いていいですかって、俺、変だからここにいるんですよ」

「なにになに、聞きたいことって？」

牡丹は笑顔を向けた。しかし、窓から差し込む陽の光りを浴びて陰影がはっきり現れた牡丹の表情は、薫を少し困らせた。

「こんなこと頼んだら、牡丹さん困りますよね？」

「言ってみないとわからないよ」

「いえ、やっぱりいいです。自分で何とかします」

「なんでよ。私、困らないと思うよ。こう見えても何でも器用にこなしちゃうタイプなんだ」

牡丹は力こぶを見せるポーズをとった。

「器用さはあまり関係ないんですけど、朝食食べないといけないから頼んじゃいますね」

「良い子だ！」

「俺の手の中に蝶がいるんです」

「チョウ？ 蝶々のこと？」

「はい。それで標本作りたくて、標本セットみたいなものってありますか？ そんな都合よくありませんよね」

牡丹は、片目をつむり、人差し指をピンと立てて左右に振った。

「薫君！ それがあるんだよ！」

「本当ですか？」

「工作ルームにあるよ。以前、薫君と同じように標本作りたいっていう人がいて、でも途中でやめちゃったの。それ使えるよ」

「やった！」

「標本作るのって、時間かかるよ」

「大丈夫です。もう、形になってるので」

「どういうこと？」

薫は手をどけて、蝶を見せてはくれない。

「標本セットを持ってきてくれたら、教えてあげます」

薫は手元を見つめたまま、微笑んでいた。牡丹はこの時、初めて薫を不気味に感じた。今まで接していてそんなことはなかった。少し人と話をするのが苦手なのかという印象で全く本心話を話さないので、正直考えていることがわからなかった。今日この時、初めて彼の心を覗くことになるんだ。心を開いてくれることに嬉しさもあり、恐くもあり。

「朝食、食べたあとじゃダメなの？」

「ほら、両手ふさがってるから食べられないですよ」

私が食べさせてあげるよと、牡丹は言えるはずもなく、

「標本セット持ってきて、蝶々を手から出したらご飯食べてくれるのね？」

「はい！」

「もう調子がいいんだから。じゃあ、持ってくるから少し待っててね」

「はい。お願いします」

薫は軽く頭を下げた。

牡丹は足早に病室を出て行った。薫は病室のドアが閉まりきるのを待った。そして、
「もう安心だよ。あと少しで身体も俺が助けてあげるからね……」

薫は、丸みを作った手の中にある蝶に小声でやさしく話しかけた。

まもなくして、牡丹が病室のドアをやっとのこと開けた。牡丹の両手は、木の箱や標本にするための道具でふさがっていた。そして、薫のベッドに置いた。ガラス版がはめ込まれ、標本として飾っておけるしっかりとした木の箱が一つ。展翅板という蝶や蛾の羽を広げて形を整える木箱が三つ。それは数センチの高さがある直方体で、表には左右を二分するように中央がほんの少し隙間が空いている。隙間に蝶の身体を入れ、羽を広げて固定する。その他に虫ピンやマチ針の入ったケース、三角形に折りたたまれたパラフィン紙もたくさんあった。

「はい、薫君。お待たせ」

「虫ピンと標本用のこの箱だけでよかったのに。他のやつは使わないよ、俺」

「えー、セットでって言ったじゃん。でも、これとか使わなくていいの？」

牡丹は中央に隙間の空いた展翅板を取り上げた。以前、夏に標本作りをして、これに針で蝶の羽や触覚を固定して乾燥させた覚えがある。乾燥させている間、待ってられなくなってやめちゃった患者さんを牡丹は思い出した。自分一人で、最後までやろうと展翅板から標本ケースに移す時、誤って触覚に触れて根元から折ってしまった。その辺りを察するに、私は器用ではないのかもしれない。

「はい、使いません」

薫は即答した。

「そう。それで、薫君はどんな蝶々を捕まえたの？」

牡丹は少し顔を近づけた。薫は子供のようにニヤニヤしている。

「それはですね……」

薫はゆっくり上になっている手をどけた。羽を羽ばたかせることなく静止している一匹の蝶々――。

「……」

牡丹には、薫の手の中にあるそれが完全なる蝶々には見えなかった。頭の中で想像してしたそれとは違っていた。想像力の問題かもしれないが、牡丹は脳に訴えかける。それが薫の言う蝶々なのだ。牡丹がマジマジとそれを見ていると、

「揚羽黄柚子（あげはきゆうず）って言います。かわいいでしょ」

と、薫はまるで自分の彼女を誰かに紹介する時のように照れていた。まさか名前までつけているのかと牡丹は驚いた。そう言われてみれば、そんなようなイメージに近いかもしれない。顔立ちからして高校生のように見える。それにどこかの学校で来ていそうな制服姿。髪はショートカット。スカートから伸びる足はすらっとしたものだが、スポーツで鍛えられたのかしっかりと引き締まっている。これだけ見たら、女子高校生が小人になってしまったのだろうと思えるが、薫が蝶々だと言っている。アゲハチョウのような野原を優雅に飛んでいそうな羽が彼女の背中にあった。黄色を基調としたその羽は、中心から外に向かって黒い線が模様を描くようにして伸びている。羽は彼女より大きく、片方の羽で上半身を隠すようにしていた。その格好は誰かに見られたくないのか、恥ずかしがっているように見える。

「薫君。いつ、どこで捕まえたの？」

「今日見た夢の中で、です」

「夢の中……」

牡丹は呆気にとられた。薫の考えていることがわからなかった。薫が目を覚ました後も夢の中の話が続けていることは十分理解できる。しかし、現に薫は揚羽黄柚子という蝶の羽を生やした子を捕まえている。

「牡丹さん。虫ピンを取ってくれますか。あとその箱のガラスを外してもらえますか？」

牡丹は薫に言われた通りに、虫ピンを渡した。それからガラスを外した木の箱を薫の近くに置いた。薫は、虫ピンを揚羽黄柚子の胸と腹部の間に差し込もうとしているところだった。

「ちょっと、薫君。刺しちゃっていいの？ 生きてるんじゃないの？」

私は彼女が活着ているように見えていた訳ではない。彼女は全く動いていない。人形のように。標本にしようとしている時点で聞くだけ無意味ではあるが、後になって、虫ピンが刺さって穴が空いていることに不満を覚えてもらっても困る。また子供のようにコレクションを傷つけられたと言って癩癢を起こされも困るから聞いたのだ。

「大丈夫だよ。もうこの子の心は俺に取り込まれているから平気なんだ。あとは俺が彼女のそばでずっと見守ってあげるんだ。そうしてあげないと悲しむから……」

薫は丁寧にかつ手際よく虫ピンを刺し、標本用の木箱に揚羽黄柚子を固定した。

「小さい部屋かもしれないけど我慢してね」

牡丹は何も言わず薫の行動を見守り、最後にガラス板を渡した。薫はそれを受け取って、木箱にはめ込んだ。

「もう大丈夫だよ！」

薫は宝物に声をかけるようにガラスの向こうにいる揚羽黄柚子に言った。

「良かったね、薫君」

牡丹は、薫の一連の行動における真意が現時点ではわからなかったが、薫が納得したことに一安心した。

「さあ、朝ご飯たべようか」

「はい」

目的を成し遂げた子供のように薫は素直に答えた。

朝食を食べている間も薫は箱を放さなかった。牡丹が食事の間だけは別の所に置くように伝えたが叶わなかった。

「ねえ、牡丹さん」

「何？」

「どうやって、揚羽黄柚子を捕まえたのか知りたい？」

「教えてくれるの？ 知りたい」

薫の主治医が聞いた時、薫がまた同じように話してくれるか分からないので、牡丹は聞ける時に聞いておきたかった。個人的な興味がなかったといえば嘘になる。薫君の心を見たい好奇心がいつの間にか芽生えていた。あの蝶々を見たのが決定打だった。

薫は、朝、学校に登校した。下駄箱の先にある生徒向けの掲示板に生徒らが多く群がっていた。首に巻いていたマフラーを外しながら、目をやる薫。そこには生徒会からのお知らせが一枚張ってあった。群がる生徒たちの後ろにいる薫の位置からでは、何が書いてあるかわからなかった。

「花咲君？」

薫は声をかけられて後ろを振り向くと、マフラーを首に巻いたショートカットの女子生徒が立っていた。

「揚羽さん！」

「おはよう！」

「急に寒くなったね。コートを着るほどじゃないけど」

「そうね。私もマフラーしてきました。慣れないショートは辛いね。少し前までは暖かったのに……」

「そうだね。でも、少し伸びた？」

「そうかな？ 襟足だけは少し長めに揃えてもらって正解だったかな」

「似合ってるよ。短い髪型もさ。……で、あの生徒会からのお知らせって、もしかして……」

「ええ。昨日の生徒会会議で決まったの。生徒会が蜘蛛手先輩の失踪事件を捜査することになった。あの掲示は、蜘蛛手先輩の行方に関する情報を生徒から集めるための告知」

「じゃあ、学校側は蜘蛛手先輩が自らの意志で学校に来なくなったと決めたんだ」

「ええ。会長はあなたに協力してもらいたって言ってました。今日のお昼にも会長自ら正式な協力要請をしに行くと思うわ」

揚羽黄柚子は周りの生徒に聞かれないように小声で薫に言った。

「本当に？」

薫は困った顔をする。

「個人的には関わらない方がいいと思います」

「それは、あぶない山ってこと？」

黄柚子は薫の質問には答えず、しばらく間を空けて、

「我がセリカ学園の頼りになる高校生探偵さん！」

黄柚子は冗談ぽく微笑んだ。

「探偵とかそんなんじゃないよ、俺は」

そう言って、薫は歩き出した。

「そうなの？ 今回のポニーテール狩りの犯人も追っているんでしょ。私たちの髪を切った犯人の手がかりは何か見つかった？」

「いくつかは……ね。でも、どれも不自然なんだよ。犯人に混乱させられているのか、決定的な推理要素を見つけられていない。犯人見つけるのに時間かかっちゃってごめんね。揚羽さんはじめ、五人もの女子生徒がポニーテール狩りに合っているっていうのに……」

「わ、私は大丈夫ですよ。もう狩られる心配はないし、また被害者が増えないことを祈るくらいしかできません。花咲さん、頑張って下さいね！」

「ありがとう。絶対犯人見つけるから！」

薫は胸の前でぐっと拳を握った。

「それでは、私は生徒会室に寄って行くので。ここで」

黄柚子は軽く会釈をし、薫は手を振って別れた。

被害者が口々に犯人から聞いたという言葉『ショートカット推進委員会』。委員会といってもおそらく犯人は一人。被害者は全員、犯人の姿を見て、その特徴は一致している。それにショートカットを推進したいのであれば、狩る髪型はポニーテールだけじゃない。長髪の女子全員を切りかからなければならないはず。ポニーテール狩りと言われるほどになった今回の事件。なぜ、ポニーテールのみを……。

やはり、最初の被害者を疑うべきか。だとしても、動機が全くわからない。二週間前の放課後、揚羽さんが第一の被害者となってから、一日おきに被害者が続出。二人、三人と増え、ポニーテールはやめましようとする案内してみたものの頑なにポニーテールをやめず、被害に遭ってしまった四人目と五人目。今はほぼポニーテールをしている女子生徒はいなくなった。それでも『ショートカット推進委員会』ならぬポニーテール狩りの犯人は、また狩りに来るのだろうか。

薫は午前中、そんなことをずっと考えていた。昼休みになり、黄柚子が言っていた通り生徒会長が直々に薫の元へやって来た。結局、薫は蜘蛛手先輩の失踪事件の手伝いをする事になった。当然、断る理由がなかった。

早速、その日の放課後、生徒会室にて生徒会会議に薫も出席した。薫は黙って会長ら生徒会メンバーのやりとりを聞いていた。

「今日から蜘蛛手一失踪に関する情報を集めたところ、早速情報が入ってきた。三年男子による情報だと、二週間前、学園に来た最後の日。放課後、蜘蛛手が屋上に向かう階段を上がっていくところを目撃したそうだ。今のところ、この情報しかない。他に何か情報を持っている者は？」

会長は周囲を見渡す。隣の副会長が手を挙げた。

「僕が調べた範囲では、家族から学園への問い合わせや警察への届け出はないようです」

「そいつはおかしいな」

会長は大げさに腕組みをし、さらに続けて、

「この学園の先生方は、重、かつ、大なることが起きても表沙汰、警察沙汰にしたくないと思っている。学園の評判を下げる事情は一切公表しない異常学園だとしても、なぜ蜘蛛手の家族も警察に失踪届けを出さないんだ」

「すみません。まだそこまではわかりません」

副会長は軽く頭を下げる。と、すぐに頭を上げて続ける。

「もしかしたら、いつものように学園側から何か渡されて動けずにいるのでしょうか？」

「口封じか、いつもの……」

「あの、それはないと思います」

会長らから少し離れた席の揚羽黄柚子が手を挙げて言った。周囲は黄柚子を見た。何か物珍しい目で。薫はそんな生徒会メンバーの後方から話を伺う。

「揚羽。どうしてそう思う？」

会長が問うた。

「はい。蜘蛛手先輩の家柄といいますか、隣町ではかなりの名家なんです」

黄柚子は、書記ノートの上でペンを握ったまま、いつでも書けるようにしていた。

「それは俺らも知っている。三年の中じゃ有名な金持ち息子だからな。それで？」

「世間体には名家として知られているようですが、裏では悪い噂が絶えないと聞いています……」

そう言って黄柚子は、目を伏せて黙り込んでしまった。

「悪い噂か。名家になら何でもありそうだな。蜘蛛手紘一と接していて、それほど悪いことに手を染めているとも思えないが……」

「んー、でも気高いところや高圧的な発言はあったけど」

副会長が答えた。

「知ればテレビドラマにでもなる悪行高き名家。それにしても、なぜそんな裏事情をしているんだ、揚羽」

「はい。私の家と蜘蛛手家は昔からお付き合いがありまして、込み入った話は入りやすいんです。詳しくは言えませんが……」

「そうか。どうしたものか。やっぱり学生が入り込むには危ないのかもな」

「会長。とりあえず最後に目撃された屋上近辺は立ち入り禁止にしておきましょう。何か証拠が残っているかもしれません」

「いや、待って下さい！」

突然、薫が立ち上がり、副会長の言葉尻に繋がった。そして、

「屋上を立ち入り禁止にするのは、すぐではなく来週からにした方がいいですよ。急に禁止にすると先生や生徒に反発される可能性があります。生徒が使うのは、昼休みに弁当を食べる時くらいですし」

「それもそうだな。先生方は、必要ないと突っ返してきそうだな。よし、花咲君の言う通り待つとしよう。花咲君、屋上を少し調べておいてもらえるか？」

「もちろんです」

生徒会会議は一時間半ほどで終わった。あまり事を荒立てず、地道に情報を集めることに捜査方針を確認するにとどまった。

薫は会議が終わった後、屋上に向かわず、校舎の裏手へ向かう。滅多に人は通らず、校舎と外の道路の間に立つ壁があるだけだ。いつも日陰になっている。そこには購買部で売っているパンや菓子の袋がいくつかゴミとなってあり、また数多くの髪の毛もあった。ポニーテール狩りの犯人がここに、切った髪の毛を捨てた場所とされていた。気味悪がって生徒は近づいてこない。全て回収しきれずに残っている髪の毛は、校舎と道路壁の間を吹き抜ける風になびかれていた。そ

の風は薫の身体を震わせるほど冷たかった。

おそらく髪の毛はここで捨てられた訳じゃない。風に流れてここへ集まっただけだ。パンと菓子
の袋もそう。薫は夕陽に染まる空を見上げるようにして、校舎の屋上に目線をやった。

ショートカット推進委員会、ポニーテール狩り、蜘蛛手紘一の失踪。どれも犯人の動機がわ
からない。明日、直接聞いてみるしかない。種は仕掛けた。その種を拾いに来てもらおうか。

次の日の放課後。

校舎の屋上に続く階段を一步一步上がって行く花咲薫。屋上へのドアを開けて出た。秋から冬
になる頃の冷たい風に薫は少し身震いした。

校庭からは部活動にはげむ学生のかけ声やホイッスルの音。体育館からはボールが弾む音や床
を走る生徒たちの駆け音。校舎内から吹奏楽の楽器の音がバラバラに、時にはそろって至る所
から聞こえてくる。それらの活動をしている女子生徒の中には、いまだにポニーテールをして
いる。そんな賑やかな学園生活を屋上から眺める女子学生が一人、フェンスの前に立っていた。あと
三十分もすれば沈みきってしまう夕陽の光りを浴び、冷たい風が彼女のスカートや背中にまでか
かる一本に結わいた髪の毛を揺らしていた。

薫は彼女の後ろに立って、止まった。

「なるほど。それが犯行の凶器であり、自分の身をごまかす姿。被害者の証言と一致する」

女子学生の両手には、顔の半分を覆う白いマスクとカッターナイフがそれぞれ握られていた。
「そしてセルフフレームのメガネをしている。このセリカ高校で起きた一連の事件ポニーテール狩
りの真犯人は、君だね。二年C組の揚羽黄柚子！」

「……」

ポニーテールの女子学生・揚羽黄柚子は振り返った。薫の言った通り、彼女はセルフフレームの
メガネをかけていた。そして、不気味に笑った。

「薄々勘づいているとは思っていたけど、今日来るとは思っていなかったよ」

ハキハキとした言葉が返ってきた。

「何のために昨日、屋上の出入り禁止を伸ばしてもらったのか。君がここへ来れるようにしてあ
げたのさ」

「こんなに早く私の元へやってくるとはね」

「校内で五人の髪の毛が連続して切られてしまったんだ。自分なりに反省しなきゃならないけど
、五人の被害者が出たことによって犯人がわかった」

「ふーん。どうしてそれが私につながるのかな」

黄柚子は平静を保ち、むしろこの状況を楽しんでいるように見えた。

「一連の事件は、ポニーテール狩りとまで言われるようになったくらいで、被害者の髪型全員が
普段からポニーテールだった。今の君のように。そして、被害者五人は皆、口を揃えて言っ
ていた。犯人はうちの高校の制服を来た女子で、髪型がポニーテールだったと。何か違和感がない
かな？」

薫は黄柚子に問うてみた。

「うちの制服を着ていたこと？」

「いや、制服であることは犯人による何らかのメッセージだと思う。この学園内の誰かに向けて、犯人はこの学園にいる生徒だと。その誰かは、俺ではなくこの学園の先生だ。学園外部の人が犯人では事が大きくなる。この学園の体質を利用して、わざとこの学園の生徒が犯人だとわかりやすい印象をつけた。すぐに見つかっては元も子もないから、木の葉を隠すなら森に隠せ。自分を隠す、カモフラージュするには制服を来ているのが一番いい。しかもポニーテール姿の女子が犯人となればね。俺が感じた違和感はそのポニーテールさ」

「それが何なの？」

黄柚子は依然と変わらない余裕の態度だ。

「ポニーテール狩りをするくらいの犯人なんだ。きっとポニーテールに対して並々ならぬ嫌悪感や犯行に至る強い気持ちがあるはずなのに、五人もの髪を切り落としてもなお犯人はポニーテール姿で犯行を侵すというのは違和感だらけだ。絶対犯人はポニーテールではないと考えられる」

黄柚子の表情に影が差す。

「普段の生活では、君はショートカットだろ。揚羽黄柚子。それにメガネもかけていない」

「ふふっ。そうね」

黄柚子は頭に被っていたウィッグとメガネをはずした。髪の短い普段の姿の揚羽黄柚子に戻った。

「やっぱり話をしていた時より鋭いね。本性隠していたでしょ、花咲薫。本当に高校生？ 同学年とは思えない」

「話をそらすな。俺のことはどうだっていい」

「ふふっ、そう？ 生徒会に頼られているのにね。髪の短い子なんて他にもたくさんいるのに何で私だと断定できちゃったの？ 先生たちすら気づいてないみたいだし」

「五人も被害者がでていのに、警察に通報していないこの学園も学園だけど、そんな大人たちは俺たちのことを見ていないんじゃないかな。表面上だけでかもしれないけどさ。そもそもポニーテール狩りが起きたのは、二週間前。君が第一の被害者。そうしたの自分が犯人だと疑われないためだ。『ショートカット推進委員会』。これも君が広めた言葉だろ？ ポニーテール狩りをするたびに、被害者に向けて発言した。被害者みんな、口を揃えて言っていた」

得意げな顔になった薫。

「辻褄はあってるよ。でもよく私だとわかったわね」

「突然、理由もなく髪を切られた割には、気持ちの立ち直りが早いかなと思ってね。他の被害者たちはまだショックから抜け出せていない」

「二週間もあれば、気持ちも落ち着くでしょ。個人差はあると思うけどさ。……それだけで私が犯人だと推測するのは勘に近いわね」

「現実的には、俺の目の前に犯人がいるんだから勘でも当たれば結果良し。けど、確信を得たのは昨日の生徒会会議でのことだ」

「昨日の？」

「そう。揚羽さんが失踪した蜘蛛手家と関わりがあると言っていた。俺も初めて知ったことだっ

たし、そこまで調べきれていなかった。それでピンと来た」

「……」

黄柚子の表情から笑顔が消える。

「ポニーテール狩りの犯人は蜘蛛手先輩の失踪に関係しているのではないかと。全ては憶測に過ぎないが、揚羽さんは蜘蛛手先輩にポニーテールを切られたんじゃないですか？ それともそれに近いことをされた。家柄の内情かなにかの揉め事に巻き込まれてね。ポニーテール狩りが始まったのは二週間前。蜘蛛手先輩の失踪時期も同じ時だ」

「ふふっ。花咲君。まるでずっと私の事を見ていたようなことを話すのね」

「憶測だよ。ストーカーまがいなことはしていないよ」

「んー、そのくらいしてくれた方が私は楽だったんだけど。んー、本当にされたら引くかもしれないけど」

黄柚子は無理に笑って続けた。

「でも、今、目の前にいるのが花咲君で良かったよ。なんでだろう、落ち着くんだよね。もしかして私の扱い方を知ってた？」

「この世の人類、それぞれの取り扱い説明書なんてものは存在しない」

薫はスパッと言い放った。

「思っていたより冷めた性格なのね。ポニーテール狩りの話は熱心に聞いてくれたのに。もう少し話に乗ってきてくれるかと思った……」

「犯行動機についてなら、かぶりつくように話に乗ってあげるよ」

「あれっ？ それは花咲君でもわからなかったんだ」

「そうだね。この世はわからないことの方が多い。お互いに知らないことだらけだし……。聞かせてくれないか。君の気持ちを……」

薫が言うと、黄柚子の無理に保っていた笑顔は一転した。沈み行く夕陽の逆行でより表情が暗く見えた。

「花咲君にわかるかな……。ワタシの気持ち」

黄柚子は持っていたカッターナイフの刃を出して、ウィッグのポニーテールを根元からためらいもなく切った。そして、冷たい風が舞う宙に切ったウィッグを投げ捨てた。一瞬にして風がウィッグ一本一本をかささらって行き、バラバラに散って行く。それらは次第に風に乗れ、校舎の裏手へと流れて行った。

黄柚子の目つきが鋭くなった。

「あの男があんなことを言わなければ、私は何も意識することはなかったのに。なのにアイツが『尻尾で何を隠しているんだ』って言ってきて、私の髪を持ち上げた。そして、マジマジと後ろの首を見てきた。私はそこを見られたくなかった。馬や猿、動物のように尻尾でお尻を隠して守っていた訳ではないけど、私は隠す行為をしていた。小さい頃からずっとポニーテールだったからそれ以外の髪型にするのは抵抗があった。でも、友達は私の後ろ首のことは誰も気づかなかった。アイツの、蜘蛛手紘一の誤ったたった一つの行動が私の心を傷つけた。いづれ知る運命にはなっていたのに」

黄柚子は薫に背を向け、首を少し前に傾けた。白い肌の首後ろにあざのようなものがある。それは蝶々の形をしていた。

「アイツは見ただけでなく、この紋章を触ってきた。そして、押した……」

黄柚子が薫に向き直ると、黄柚子は瞳に涙を溜めていた。今にでも溢れ出しそうだった。

「……もう私、隠しておけない。全部しゃべって楽になりたい。最後に私の醜い姿を見せてあげる」

涙をこぼしながら語る黄柚子を薫は冷静に見つめていた。

「普通の人として、悩んでいることがどれだけ幸せなのか。私はそうなりたかった。お父さん……お母さん……」

黄柚子は首後ろに手を回し、蝶型の紋章を押した。黄柚子は全身の痛みをこらえているように身体を震わせ、悲鳴か喘ぎ声ともつかない声を出した。そして、背中からアゲハチョウの羽が黄柚子の身の丈以上にバツと一瞬で広がった。まるで黄柚子の体から風を巻き起こすような勢いだった。

薫はその突風に押され一歩足を下げた。

上の羽は直角三角形が向かい合ったような状態で、下の羽は扇を広げて一カ所だけシッポのように長く伸びた部分がある。黄色い羽は黄柚子の一部だった。

「なぜ、そんな羽が……」

人の体に生えているのだろうか。薫は問うた。ファンタジー映画でも見ているのだろうか。それとも科学と人の融合か。薫は自分を納得させるだけの理由は見つからなかった。

「これは揚羽一族、本血族のみが継承する種の繁栄記録。後ろ首にあった痣は、この羽を一時的に封印しておくための封印紋章。呪われた印よ。羽は成長とともに大きくなるから非人道的な技で押さえ込んでいるの。大昔は、揚羽家も強い力を持った名家だったらしい。けど、今は仕掛けられた蜘蛛の巣に引っかかって蜘蛛手家の言いなりよ。二十歳を迎えた時、許嫁と結婚するの。……もういなくなってしまったから、きっとまた代わりが私の許嫁として紹介されるだけ。現代には無用なこの呪われた身体を受け入れてくれるところは蜘蛛手家しかないの」

「でも君はどんな形であれ、二人にその姿を見せた。少し心境に変化があったんじゃないのか？」

「あったよ。最悪にねじ曲がった形で」

「……」

「花咲君も見たでしょ。羽が出てくる瞬間を。アイツは何も考えず私の背後で紋章を押した。羽の出てきた勢いで、アイツは吹き飛んで頭を強くうって死んだわ。そして、この羽で空を飛んだ。死体を山に捨てに――」

「……」

「この羽のせいで私はけがれてしまった。いいえ、この羽自体がけがれよ。こんな醜い私をわかって好きになってくれる人なんているのかしら。こんなおかしい私の体を抱いてくれる人なんて――」

「そんなことないさ！」

薫は笑って黄柚子を見つめた。そして、黄柚子の横を通り越し、フェンスに歩み寄った。

「大丈夫。次の瞬間で、揚羽黄柚子の羽は生まれ変わる。安心してくれよ！」

黄柚子には薫の言っていることが理解できなかった。

次の瞬間、薫はフェンスを飛び越えると、何の躊躇もなく校舎のへりから自らの意思で飛び降りた。

「え！ 花咲君！」

校舎は五階建て。下はコンクリート。考えなくても薫がどうなるかくらいわかっている。黄柚子は考えるまでもなかった。気づいたら羽を羽ばたかせ、落下する薫を追っていた。蝶々の優雅さを気取る暇はない。光のごとく薫を追う。地面に向かって逆さまに落下する薫に黄柚子が追いつくと、薫は笑っていた。黄柚子は薫を抱きしめて宙に浮かび上がった。

「助けてくれてありがとう。助けにきてもらえなかったらどうなっていたことだろう……」

「もうそんな状況は嫌よ」

「純粋な君の心と君しか持ち得ていないその羽のおかげで、俺は助かった」

薫は黄柚子を抱きしめた。

「……自分から飛び降りておいて、そんなこと言わないでくれる？」

「揚羽黄柚子……俺がずっとこうしててあげるから」

薫はもう一度強く黄柚子の体を抱きしめた。

「うん」

沈みきる寸前の夕陽に照らされた黄柚子の羽は輝いていた。

薫は朝食を食べている間ずっと揚羽黄柚子の話をしていて、牡丹はそれを薫の表情を見ながら黙って聞いていた。話が終わると同時に朝食を食べ終えた。こんなに楽しそうに食事をしている姿は見たことがなかった。病院食が味気ないこともあるが、薫が自ら話をしたことに充実感を覚えたのだろうと牡丹は感じた。

「それで薫君の夢の中で捕まえた女の子がその子という訳ね」

「そうです。夢の中でこの子の心をつまめるんだ。そして抜け殻になった体を俺のそばで見守るんです。俺の 使命なんです、きっと。誰かに言われた訳ではないんですが、そんな気がします」

「そうなんだ。それはそれで大変ね。でもこれは薫君にしかできないことだから頑張らないとね」

薫の見るその夢は夢なのか。彼自身が作り出した単なる妄想の世界なのではないか。その世界で捕まえたそれが証拠らしい。甚だ疑問は尽きない。しかし、ここではそう簡単に答えを出す訳にはいかない。そうでなければ、こんなところに長居する必要はない……。と、思う一方で、牡丹は揚羽黄柚子の気持ちがわからない訳でもなかった。特に誰にも言えない悩みという部分に関しては、それに何とかしてあげたいと思い、行動した薫の気持ちもわかる。

でも、私は誰にも言えない悩みを持っている薫に何かしてあげられるだろうか。高校生がこんなところにずっといてはもったいない。急ぐ必要はないけれど、少しでも早く外の空気に触れてもらいたい。たくさんの刺激的なことが経験できるよ、と心の中で願うだけ。それが今、私ができることになりそうだ。

「牡丹さん。ごちそうさまでした」

「はい」

「おはよう！」

朝、そう言ってスライド式のドアを開けて薫の病室に入って来た牡丹。室内は薄暗い。今日は昨日と同じように晴れているが、カーテンが閉まりきっていて陽の光りが遮断されていた。まだ薫君は寝ているのだろうと牡丹は思った。昨日の朝のやり取りを思い出し、目覚めの声を掛けてあげようと牡丹は音をたてずにベッドに近づいて行く。薫は布団を頭までかぶり寝ているようだったが、布団の中から何か聞こえてくる。

「……」

牡丹はさらに近づくとそれが何なのかわかった。薫のすすり泣きだと。

「おはよう、薫君」

布団の上からやさしく声をかけたが、薫は泣き続けているようで牡丹の声には反応を示さなかった。

「薫君。朝だよ」

もう一度牡丹は声をかけたが、やはり反応してくれない。声は聞こえているのだろうと牡丹は思っていた。

「ほら、薫君。朝の光りを浴びよう。気持ちいいよ」

牡丹はそう言いながら、ゆっくりカーテンを開けた。カーテンレールの動く音が聞こえなくなると、布団の中のすすり泣きも聞こえなくなっていた。

「薫君。起きれるかな？」

布団の中がもぞもぞと動きだし、ゆっくり薫の顔が出てきた。涙が目の縁に沿って横に流れていた。目は赤く充血している。牡丹は男子の、しかも高校生の泣いた姿を見たのは初めてだった。学生時代から今に至るまでそういった状況に出くわしたことはなかった。むしろ、男性はほとんど人前では泣かないと思っ込んでいたくらいだ。こういう時の男性は甘えたいのだろうか……。

しかし、薫の表情を見ているとそれはないと感じた。薫は私のことを見ていないどころか、顔を私の方に向けてもくれない。まるで陽の光りに照らされるのを嫌っているようだ。

「どうしたの？ 怖い夢でも見た？」

そう聞いておいて、そうじゃないんだろうと思っている牡丹。

「違うんです。俺、彼女を守ってやれなかった。いつも一緒にいたのに……」

薫が悲しんでいることはわかるけど、彼女とは一体誰なのか。牡丹は揚羽黄柚子がいなくなったのだろうかと思った。昨日の今日で新たな夢の続きを見たのだろうか。

「彼女がいなくなったことを忘れようとしていた。すべてがつかったんです。何もかも忘れて生まれ変わろうなんてできる訳なかった。変えられるのは人生くらいで、自分を別人にすることは何をしても生きていく以上はできないんです……」

「薫君はそう思ったんだね」

「……はい」

「つらかったんだね」

「……はい」

「話してくれてありがとう」

すると薫は袖で涙を拭い、布団の中から黄標本ケースを引き出した。これを布団の中で抱えるようにしてうずくまっていたようだ。牡丹はケースの中を見ると、蝶々の羽を生やした女の子がさらに一匹増えていた。揚羽黄柚子の隣に並ぶその子は、黄柚子と同じアゲハチョウの形をした羽だが黒い。上の羽は白と赤の斑点が並び、下の羽は赤い斑点だけが並んでいる。黄柚子と違って黒に赤が混じる羽と笑っていないその表情で何か強い印象を牡丹は持った。またこの女の子は両手を腰に当てて堂々としている。

さっき薫が守ってあげられなかった人とはこの子のことなのだろう。しかし、守れなかったと薫は言っていたに、なぜこの子はここにいるのだろうか。守れなければここにはいないと思う。牡丹には矛盾しているように思える。

女の子は自信に満ち、何にも負けない強さを感じるのに、薫の中では何が起きたのだろうか。牡丹が考えていると、薫が語り出した。

真夜中。

ほとんど人が通らなくなった山道を、風を切るように走っている赤星稲穂と花咲薫。木々の葉の間からわずかながら月の光が二人の進む土道を照らす。稲穂は重力をものともせず、ジャンプして進む。薫は草に覆われた細い道を走る。森の侵入者二人を攻撃しようと向かってくる巨大蛾。羽を広げると全長は熊くらいの大きさはあるだろう。

稲穂は腰に携える刀を鞘から抜き、巨大蛾に向かってタイミング良くジャンプする。そして、一閃の光とともに蛾の片羽を切り落とす。羽を失って飛べなくなった巨大蛾は地面に落下し、土埃を巻き上げながら地を転がって行った。すぐに別の巨大蛾が薫に向かって行く。薫はそれ気づき、第二ボタンまで外した学ランの左胸に手を入れた。懐にある銃を取り出し、巨大蛾に銃口を向ける。次の瞬間、薫の目の前を一閃の光が縦に走った。巨大蛾は冷凍マグロが真っ二つに裁断されたようにパツクリと割れ、薫を避けるように左右を通り過ぎて行った。例のごとく、草木の上を転がる音が後方から聞こえてきた。

銃口の先には、稲穂が刀を肩に置いて薫を睨みつけていた。

「なんだよ、稲穂。俺がしとめるところだったのに」

薫は銃を降ろして、悔しそうに言った。

「それ、サイレンサー付いてない。それに敵の追跡を感じる。まだ遠くだけど近づいてきてる」

稲穂は小声で言うと、薫は口を閉じ耳をすます。ただただ森の中は静かであった。どこからか巨大蛾の羽音が聞こえた。それは稲穂たちとは違うどこかへ向かっているようだ。

「確かに俺たち以外にも、いそうだな」

「目的地の施設に行くまで、薫は撃っちゃダメよ。襲ってくる蛾は私が切るから、薫は私においてかれないように走って。あと、これ持って」

稲穂は表情をいっさい変えずに、背負っていたスクールバッグを薫に手渡した。

「えっ、自分の荷物だろ。自分で持てよ。俺も自分のがあるんだぞ」

と、言い返したところで俺の意見は稲穂には届かない。いつものことだ。素直に荷物を受けるほかない。

「あと、それ。上着貸して」

稲穂は、着ていたオレンジ色のブレザーを脱ぎ始めた。

「何でだ？」

「任務用の服ではないから目立つ。森を抜けると森が開けて月の光に照らされる。身を隠せる場所もない」

「俺だって任務服持ってきてないし。だいたい学校終わりに連絡が来て、そのまま現場直行で」

「私もよ」

稲穂は先の要求を撤回するつもりはさらさらない。当然それを拒否できない薫。学ランを脱いで、稲穂に渡した。かわりに稲穂のブレザーを受け取った。

「これ、思っていたより重いよね。それ、私のバッグに丸めて入れておいて。急いで行きまし

よう」

稲穂は学ランに袖を通しただけで、ボタンはしなかった。そして、学ランに隠れた長い後ろ髪を片手で外に出した。

もう自分だけ上手く準備を整えて俺のことはおかまいなしかと、思いながら薫はブレザーを稲穂のバッグに入れた。そして、薫は、肩から脇にかかるガンホルスターをさっといったん外して、白いYシャツを脱いだ。薫は黒いTシャツ一枚になり、その上にもとあったようにガンホルスターをつけた。後ろ腰に手を当ててもう一丁銃があることを確認した。

「まだなの？」

「そう急かすな」

薫は自分のバックから予備弾倉を四つ取り出した。半分に別けてズボンのポケットに突っ込み、二つの荷物を背負った。

「行こう、稲穂」

「遅れずに着いてくるのよ」

稲穂は言い終わると同時に走り出した。長い後ろ髪をなびかせて走る稲穂を追う薫。進めば進むほど巨大蛾が襲ってくる数は増えて行く。稲穂はそれらをものともせず、薫をかばいながら切り倒していく。

「だいたい、人里離れたこんな山奥の先に何があるんだ。ただちに急行して主を救出っていうアバウトな任務。セリカからの情報が少ないと思わない？ こんな大きな蛾が絶え間なく飛んでくるし」

薫は思っていたことを稲穂に聞いた。無論、はっきりとした答えが返ってくることなど期待していない。特殊能力任務機関SeLiCa（セリカ）の急務要請はいつもこんな感じだ。現場に指揮官がいる訳でもなく、臨機応変に対応した行動をとれというスマートな戦略である。さらにいえば後から援軍が来ることは滅多にない。中学二年生という若さと特殊能力の意外性のみで今まで任務をこなしてきた。今回もそれはなんら変わらない。

「この先にあるのはセリカの施設。そこは私が育った場所」

稲穂がはっきり答えた。

「えっ。こんな山奥出身だったの？」

「いいえ。生まれは普通の街。ここに連れて来られたのが小学二年になった頃。幼少の頃はあまり意識なかったけど、小学生になって体の使い方が分かり始めてから、周囲からは特別な目で見られた。運動能力が桁違いに周りの同級生や男子、大人と違っていたから」

この三年間稲穂と任務をともにしてあまり稲穂が特別に凄いと感じていなかった。自分の中でセリカの任務と日常は完全に区別していたし、周りの友達だって特殊能力と言えるものは持っていないにしろ、それぞれ特有の力を持っていると感じている。勉強や音楽、趣味など自分ができないことや知らないことがそれぞれあって稲穂の運動能力や特殊能力もその一つだと薫は思っていた。

「じゃあ、そこで刀の使い方を学んだの？」

「それもあんだけど、ほとんど特殊能力の訓練だった。実験も兼ねていたみたいだけど、私以外の

被験者は体質に合わなかったり、能力異常で皆死んでいった。唯一、生き残ったのが蝶獣化をコントロールできた私だけ。良くも悪くも遺伝子が普通じゃなかったみたい。もし遺伝子が普通だったら、こうになってしまう」

稲穂は、目の前に襲ってきた巨大蛾の一匹を一振りした。

「こうなるって……」

薫は切られて動かなくなった巨大蛾を見て、稲穂に聞いた。

「完全蝶獣化の成れの果てがこの巨大蛾。人として躯体はおろか、意識もなくなる。あの施設にいる間、毎日のように目の前で完全蝶獣化していく人たちを見てた。いつか私もアンコントロールに陥ってあーなるのかもって怯えていた。けど、まだみたいね」

「まだって……。じゃあ、今、巨大蛾がこんな飛んでくる理由は」

「おそらく何らかの理由で完全蝶獣化の種が施設内で飛散して人々の体内に入り込んでしまった」

「種？」

「種と言っても粉よ」

「さらにやっかいだ。もし、俺が吸い込んだら……」

「私みたいになれるかも……」

「ああ、その時は自分のDNAが稲穂パターンであることを祈るよ」

「そうだといいわね……」

稲穂は歩みを止めた。薫もそれにならう。森が開け、草原の中心に茅葺き屋根の古民家が一軒建っていた。どう見ても使われていないように見える。

「あれが施設？ 想像と違うな。白い壁に囲まれて塵一つ落ちていない研究施設だと思っていたけど……」

古民家の周囲を数匹の巨大蛾が飛んでいる不気味な光景を見ながら薫は言った。

「研究施設は薫の想像通りよ。あれはただの入口。施設自体は地下にある」

「なるほど」

薫は納得した。

と、その家の中から一匹の巨大蛾が出てきた。また続けてもう一匹。

「どんどん出てくるってことは、施設の中は……」

薫はそれ以上、口にしなかった。

「……施設の主の救出は難しそうね。中にいた関係者は全員完全蝶獣化してしまったかも」

「どうする？」

薫が訊ねた。稲穂は古民家から視線をそらそうとしない。

「中の構造を私は把握しているから、調べてくる。薫は外にいて。種を吸うかもしれないし……」

「一人で大丈夫か？」

「中の状況を確認してから判断する。その時は呼ぶから。でも種が飛んでいたら入らない方がいいわね」

稲穂は刀を握り直して、「行くわ」と言って木の陰から飛び出した。稲穂に気づいた巨大蛾たちが一直線に襲いかかる。が、巨大蛾の勢いをものともせず、稲穂はいっさい無駄のない動きで刀を振り、次々と巨大蛾を切っていく。そのまま稲穂は古民家の中へ突入した。

薫は稲穂の背中を見届けた。しかし、森の中にわずかな空気の異変を感じた。多くの人の気配が森の奥から迫ってくる。暗い森の中に立つ木々が今にも襲ってきそうだった。すぐに薫は胸のホルスターから銃を抜いて、古民家に走り出した。二人分のスクールバッグをかつぎ、低姿勢で古民家の中へ入った。幸い、稲穂のおかげで家の中には巨大蛾はいなかった。壁からそうっと顔を出し、森の様子を見る薫。

「やっぱり……」

森の中には、銃の先に取り付けられた赤いレーザーポインターが蠢いていた。ポインターの数は二つや三つではない。五十、いや百個が闇の中を飛び交っていた。まるで闇夜に現れた悪魔の目のようだ。すると、いっきにポインターが古民家に向けられた。すぐに顔を引っ込める薫。

――撃たれるのか？

……。

……。

「双銃の花咲薫。お前がそこにいるのはわかっている。大人しく投降しろ。これはセリカ本部からの命令だ」

本部からの命令だと？ 薫はもう一度森を見た。拡声器を持った大柄の男が一人立っていた。その男を中心に銃を持った兵士がざっと百人横に並んでいる。

「この蝶獣化施設内で、事故があった。あつてはならぬ事故だ。なんとしてでもこの中で事態を収拾したい。残念ながら、セリカはこの施設を破棄するとともに爆破し、蝶獣化の種を破壊することが決まった。そして、もうお前の任務は既に完遂している」

……。

……。

この兵士の数では俺をもってしても勝ち目はない。

薫は古民家から出て素直に男のもとに向かって歩き出した。男の前までくると、

「確保しろ」

男がそう言うと、二人の兵が薫を捕まえた。

「一体、何を……」

「ヨシ。引くぞ！」

男は兵士全員に合図を出した。そして、無線機に向けて話し出した。

「アミからハチへ。花咲薫を確保した。これからアミは速やかに森を出る。赤星稲穂はシミュレーション通り施設内に侵入。また三分後に合図を送る。それまでハチは上空にて発射待機。どうぞ」

ラジャと返事が来ると、いっせいに走り出した。薫は兵士に抱え込まれてしまった。

「おい、どういうことだよ。まだ稲穂が中に……。俺のパートナーが……。説明しろ」

薫は手足をバタバタとさせた。

「セリカの蝶獣化プロジェクトは終わりだ。ほとんど成果は得られず、赤星だけが成功したに過ぎなかった。最終的には種が暴走を起こした。人には蝶獣化は向いていない。そして、人間には蝶獣化はコントロールできない。もうこれ以上被害を出す訳にはいかない。それに赤星も完全蝶獣化してしまう可能性もゼロではない」

「だからって、稲穂ごと施設を爆破するのはひどすぎる。もう少し対応できるだろ」

「何も知らず、一瞬で終わるんだ。苦しんで死ぬよりは……楽だ」

「そんなわけ、あるかあ——」

薫は腰に手を回して銃を抜き、大柄の男に向ける。兵に抱えられながらも狙いを定める。この短距離で俺は外さない。

引き金を引いた。

乾いた音が森の中へ響き渡った。

——。

男は平然と走っている。

「バカな……。はずした……」

「違う。お前が外したんじゃない。俺がお前の弾を避けたんだ」

「……」

「俺もお前と同じ能力だ。超速移動している物を見極める。だから、これだけの数の兵士を集めた。お前でも全部は避けきれない」

「……」

「これはセリカの決定事項だ。あきらめろ」

「稲穂……」

薫はうなだれた。

その時、後方から爆発する音が聞こえてきた。予定の爆破とは違うようで、男が無線機に何事だと聞いていた。

辺り一面に赤い閃光が走った。まるで雷の稲妻のように。

「こ、これは、赤い稲妻！ まさか……」

男は赤い光が止まった方向を見ると、学ランを着たスカート姿の稲穂——頭から触覚が伸び、背中に蝶の羽を広げて立っていた。不気味に、しかし鮮やかに赤い斑点が光っていた。そして、稲穂の隣には兵に抱えられていたはずの薫が立っていた。

「ちっ。赤い稲妻と双銃コンビ。そろってしまったか。構えろ！」

男が言うと、赤いレーザーポインターが稲穂と薫に集中する。

「稲穂。無事で良かった。危ないところだったんだぜ。セリカが稲穂を施設ごと爆破するところだった。出てこれてホントによかったよ」

薫が安堵すると珍しく稲穂から握手を求めてきた。稲穂は笑っていた。今までにこんな表情を見たことはなかった。

「ありがとう、薫。最後まで私のことを想っていてくれて」

「当たり前だろ。任務中はパートナーなんだし、それに俺の少ない友達だしな」

それを聞いた稲穂は目頭に涙をため、体が震え始めた。

「どうしたんだよ、稲穂」

「もう施設内は手遅れ。皆、完全蝶獣化していた。種の暴走は思っていた以上に深刻だった。薫、あなたは入らなくて正解だった。入っていれば、瞬時に蝶獣化してしまっていた」

差し出された稲穂の手を薫はまだ握らずにいる。

「珍しいな。稲穂からそんなに話をしてくれるなんて……」

「もう蝶獣化制御も限界に来てる」

「……」

「施設内に蔓延していた種を浴び過ぎた。私の意識も体も徐々に蝕まれている。だから……」

稲穂が一度瞬きをした。

涙がこぼれた。

「だから、最後に唯一のパートナーの薫に」

パチンと稲穂の手を薫ははたいた。

「黙れ！ それ以上、俺は聞きたくない」

「……」

「……」

稲穂は一步、薫に歩み寄った。そして、稲穂の赤い蝶の羽が二人を包み込んだ。

「これは薫にあげるわ。私にはもう必要ないし、私だと思ってくれてもいいわ。……本当にありがとう」

稲穂は薫に刀を手渡し、薫を抱きしめた。稲穂が何かに苦しんでいるのが肌を通してわかった。その何かは薫もわかっている。

「お願い。薫の前では私を、この蝶のままでいさせて。心の中で私を住まわせて……」

稲穂が薫の耳元でつぶやくと、羽を広げた。

「わかった。好きなだけ居ろよ……」

二人はしばしの間、無言で見つめ合った。

そして、稲穂の表情が歪んだ。肌が変色し始めている。

「そろそろ、薫の中に入らなくちゃ」

稲穂は最後にそう言って、稲妻のごとく施設に向かって飛んで行った。

「稲穂――」

薫は息が切れるまで叫んだ。

薫はすぐに兵に抱えられて、森の中を出た。

薫はものすごい爆発の音を聞いた。

薫は森の中から立ち上る炎と爆煙を見た。

薫は赤星稲穂という蝶々を飼い始めた。その時から。

牡丹は、薫の病室を訪れてからお昼を過ぎるまで、ずっと薫のそばにいた。その間、泣きながら赤星稲穂の話をした。心の奥底にたまっていたモノを全て吐き出すかのように。

薫の話を聞いていると、夢の話ではなく過去に赤星稲穂という女の子とタッグを組んで任務をこなしていたのではないかと思えてきた。薫の話が昨日の出来事の延長線上であるならば今回の話も夢の中の出来事なのだろう。しかし、薫は稲穂が死んでしまったことに対して、友達というよりも恋人を失ってしまったような悲しみを帯びている。高校生の男子が夢の中でみたことをまるで体験したかのように人前で涙をながしながら話せるのだろうか。牡丹は自分が高校生時代に、同級生の男子が涙ながらに話す姿などみたことはないと振り返った。やはり薫が特別な感情を持ち合わせていたのだろうか。

牡丹は薫が落ち着くまで、ずっとそばにいた。同じ話を何度も繰り返そうとも、薫の目を見ながら頷いてあげた。ただ、私はそれ以上のことをしてあげられない。何か模索しても答えは出ない。

時折、別の看護師が戻ってこない牡丹を心配して病室にやってくるのがあったが、牡丹は平気だというサインを送り返していた。

牡丹は薫の夢の話で、一つ疑問を抱いていた。朝、薫が話では稲穂のことを忘れようとしていたと言っていた。しかし、夢の最後では蝶のままの稲穂を心に住まわすことになっていた。それでも忘れようとしていたのはなぜか。まだ続きがあるということだろうか。結局は、薫の夢であり、心情の波にばらつきが生じていたのだろう。牡丹はそこまで考えて、思考を止めた。

「牡丹さん」

落ち着いた薫が言った。

「何かな？」

「俺、いつかこの病院を出ることができたら行きたい場所があるんです」

「……どこ？」

外国か、見たことのない世界を見てみたいというのだろうか。意外にも身近で落ち着ける場所か。大学への進学か。そんなことを思いながら牡丹は聞き返した。

「お墓参りに」

「……」

牡丹は呆然として何も言えなかった。

「彼女を亡くしてからの三年間、一度も手を合わせに行きあげられなかったから。というよりも、俺自身が彼女から逃げていたんです。今日、牡丹さんに話をしてわかりました。忘れようとしても意味がない。ただ苦しいだけで、ちゃんと向き合えば接し方も変わってくるんだと思います。彼女を心の中で再認識しました。俺の心の草原で彼女は優雅に羽ばたいていました」

「おはよう！」

朝、そう言ってスライド式のドアを開けて薫の病室に入って来た牡丹。カーテンは薫のベッド付近だけ空けられ、明るくなっていた。薫は起き上がって、ベッドをコの字にまたぐテーブルの上に手を置いてなにやら遊んでいる。その表情は明るかった。

「もうすぐ朝ごはんだよ。と、噂をすれば朝ごはんが来たよー」

薫の言葉は優しく、幼児に向けて話すように牡丹は聞こえた。朝食を乗せたトレイを持ってベッドのそばまで行くと、薫の左手に例のごとく蝶の羽の生えた女の子がいた。右手には何もなく、指を使って人を模しているような動作をしている。さっき薫が子供っぽい台詞を言っていたのは右手の人物になりきってのことだろう。

「おはよう、薫君。新しい女の子？」

牡丹はテーブルの端にトレイを置いた。

「おはようございます、牡丹さん。この子は俺の妹ですよ。もう忘れちゃったんですか？ 昨日、一緒に会いましたよね」

「えっ、あーそうだったね……」

牡丹は、そうだったかなと昨日のことを思い出した。しかし、実際はそうではなかったので答えるのに言葉が詰まった。

「さあ、朝ごはん食べよう。その子、しまいましょうか」

もちろん、しまう先は標本ケースの中だ。

「紅子と一緒にいてくれるんです。紅子は大人しくここにいるんだよ」

薫はテーブルの上にティッシュの箱を置き、その上に紅子（もみこ）と名付けられた妹をイスに座らせるようにやさしく置いた。薫の動きは関節機能をもった人形を扱うようだった。人形のように節々を動かすことができることに、牡丹は驚いた。ベッド脇にある台の上の標本ケースを見て、この中にいる子たちも動かせるのだろうか。と牡丹はガラス越しに、膝や腕、首を観察した。蝶の羽を生やした二人の女の子は、動かされた様子は全くない。表面上、関節機構のような作りは見られず、人と全く同じだった。実は皮膚の下に隠されているのかとも思ったが、不自然な膨らみなどはない。

ティッシュ箱の上にちょこんと座っている紅子で三人目。薫が泣き乱した後、二日間は何も起きなかった。涙を流してすっきりしたのだろうか。蝶の女の子を捕まえることはなく、精神的に薫は落ち着いていた。てっきり毎日連続して女の子が増えていくのかと思っていたけど、そうではないようだ。朝食を食べ始めた薫を見ながら牡丹は考えていた。何か法則らしいものはあるのか。わかっていることは、今のところ朝、薫君の手に握られているのが蝶の羽を生やした女の子ということぐらいだ。それがどういう心理状態の時に現れるのかは不明だ。

「昨日、お母さん来たよね。何を話してたの？」

牡丹は問うた。

薫の母親は二週間に一度ペースでかかさず様子を見に病院まで足を運んできてくれる。自宅か

ら病院まで県をまたぎ、こんな山の中まで。それでも二週間に一度という頻度はとても高い方だ。素晴らしい親御さんだ。他の患者さんの中には、一年に一度、それ以上見に来られない親御さんも少なくない。薫はとても良い方だ。確か薫君が入院する日、お父さんと妹も一緒だったと聞いた。しかし、妹さんはそれ以来、病院には来てなかった。昨日は、お母さんだけしかお見舞いにこなかったのに……。

「ずっと妹のことばかり話してました。入院してからは会っていませんでした。妹は新しい習い事を始めたらしく、続けていけるのか少し心配しています」

「何を始めたの？」

「歌です。地元で合唱団があって、入りたいです」

「じゃあ、将来は歌手になるの？」

「歌手ではないと言っていました。ピアノを引けるようになって曲を作りたいそうです」

「作曲家だ」

「ええ。たまたまテレビで曲作りのドキュメンタリー番組を見て、触発されて」

「曲作りの番組なのに、歌を？」

「俺もそこは不思議に思ったので聞いたら、歌う人のことも知っておかないといけないからと言っていました。きっとテレビでそう言ってたんだと思います」

「へえー。小学生なのにしっかりしてるね、妹さん」

「いつか俺のために曲を作ってくれるって」

「あら、素敵じゃない。できたら私にも聞かせてよ」

「はい……。みんなの心が安らぐようないい曲を作りたいって意気込んでます」

「みんなの心が……か」

牡丹は小さい声でつぶやいた。

「それはそれで俺は嬉しいけど、あまり無理して欲しくないのが本音です。うちの妹に限ってないと思うけど。紅子のようになっては欲しくないから……」

薫は、ティッシュ箱の上で微動だにしない新しい妹、紅子を見つめた。

両開きの大きなガラス扉の片方を押して建物の中に入る薫。一直線に伸びる廊下が待っていた。清掃がきっちり行き届いていてきれいだ。塵一つ落ちていないと思えるほど。

「時間通りに着けそうで良かった」

薫は携帯電話で時刻を確かめた。あと十分で午後九時になる。辺りを見回すが誰一人いない。高校の制服姿でスクールバッグを肩にかけている薫。クリアファイルに挟んだ建物の案内地図を見て歩き出す。

十メートル間隔くらいにドアがあり、研究所名があれば会社名もあった。名前のない所は空き部屋なのだろうかと思いながら、入口からだいぶ歩いた所で薫は止まった。ドアには、

夢録館『世莉香』

と、印字されていた。

薫は案内状の書類をもう一度確かめると、夢録館『世莉香』（ゆめろくかん・せりか）の場所と一致していた。そして、自分の制服を見える範囲できちっと直した。面接に来た訳じゃないんだけどと思い、少し緊張した面持ちでドアをノックした。

静かな廊下に鉄と骨のぶつかる音が響いた。中から何の反応もない。もう一度ノックする。

「はいー。どうぞ」

やや間が空いて、ドア向こうから聞こえてきた。甲高い女性の声だ。

「失礼します」

と、薫はドアノブをひねって中に入った。

「えっ！」

中の様子を見て思わず驚いた。廊下とほとんど変わらない真っ白の壁に囲まれた空間が広がっていた。窓はなく、電気の光が壁に反射して夜とは思えないほど眩しい。奥から先の声の主が小走りで薫のもとへやって来た。

「ようこそ、夢録館『世莉香』へ。お待ちしております。えーっと、はなざきサマ！」

一礼をして、確認用の書類を見て薫の名前を言ったのは、まだ小学生にしか見えない女の子だ。薄ピンク色のポンチョ風の羽織りを着て、幼い女の子の笑顔が相まって、薫には妖精のように映って見えた。しかし、それは一瞬のこと。

「予約してました花咲です……。君、一人？」

すぐに不安になった。だだっ広い部屋の中には他に誰もいない。

「はい、私一人です。皆様、驚かれるのですがご安心下さい。まだ十才ですが、しっかり夢録（ゆめろく）いたします。ご心配いりません。送付いたしました書類をお受けいたします」

「あ、はい……」

幼くもハキハキと話す女の子に持っていた書類を手渡した薫。こういう対応には慣れているようだね。

「スリッパに履き替えて、奥へどうぞ。靴はここに置いておいて大丈夫です」

薫は用意されていた一組のスリッパに履き替え、脱いだ靴をそろえた。ふと横に目をやると、女の子の小さな靴が壁際においてあった。それは小学生の女の子が履くようなものではなく、ただ白い学生上履きに近いものだった。

「こちらです。どうぞ！」

とことこと前を歩く女の子に着いて行くと、ふかふかの絨毯の上に案内された。絨毯には小さな机が一つある。女の子はスリッパを脱いでその上を歩いて机についた。

「どうぞ、はなざきサマ」

薫は少し変な気を起こしそうになっていた。夜の時間に、二人しかいない空間。一人は思春期真っただ中の男子高校生。もう一人は仕事をしているとはいえ、小学生の女の子。俺が何かしたい訳ではないが、今までに何かしら起こっていてもおかしくない状況な気がする。高校生だけが来る場所ではない。俺より年上のいい大人だって今までにたくさん来ているはずだ。

「いつも一人なの？」

心配になって薫は聞いた。

「仕事の時は一人ですよ。隣の部屋にお手伝いさんがいるので、ちゃんと食事もとれています」

女の子は、書類に目を通しながら丁寧に答えた。これも単なる台詞かと、薫は思った。

「それでは夢録いたしましょう。はなざきサンの夢録をさせていただく志染紅子（しじみもみこ）と申します。改めましてよろしくお願いたします」

紅子は丁寧に頭を下げた。

「こちらこそ、よろしくお願いたします」

慌てて薫も礼をする。

「夢録（ゆめろく）は何も怖くありません。ここで私と一緒に手をつないで朝まで寝ていれば終わります。夢録したい夢がここで見るができるのか心配になる方も多くいらっしゃいますがご心配いりません。はなざきサンは見たい夢を頭の中で思い続けていて下さい。眠るまでに私が夢軌道に乗せます。花咲さんは、必ず夢録したい夢を見ることができます。そのために私がおります」

紅子という夢録を行う女の子は、笑顔で説明する。薫は紅子の説明で説明上の理解はできたが、科学的根拠の一つもない中で不安だらけではあった。しかし、紅子の背後にある大きな壁一面の棚には、ビデオテープがずらりと並んでいる。よく見ると日付と人名がラベリングされている。

。

「気づかれましたか。ここにあるテープは全部私が夢録したマスターテープです。千本、千人分ほどの夢録です」

「千人？ そんなに……」

「一日に二、三人、夢録する時もあります」

「じゃ、単純に三年間ずっと夢録し続けているってこと？」

「そうですね。これがはなざきサンのマスターテープです。これに見たい夢を夢録しますよ」

VHSよりひと回り小さいテープを紅子が見せた。後日、これをVHSテープに移して送られ

てくると書類に書いてあったなと薫は思い出した。

「まず、私が夢録蝶になります」

紅子は立ち上がった。

「ゆめろくちょう？」

「はなざきサンの夢を記録できる体になるという意味に近いです。私が夢録蝶になったら、眠気が襲ってきますが、決して抗わず見たい夢を思い描いて下さい」

「えっ！ ああ……」

「行きます！」

紅子は両手を胸の前で合わせた。すると紅子に光が集まり出す。と、薫は急にまぶたが重くなった。紅子に集まる光が魔法のように薫の眠気を誘い出している。頭の奥からやってくる眠気に抗うつもりもないが、もう少しの間紅子を見ておきたいと薫は思った。まぶたが後一秒で閉じる。と、その時、紅子に集まっていた光が体内で増幅されたかのようにいっきに解き放たれた。同時に紅子の背中に小さなオレンジ色の羽が生えた。まるで口の開いた貝が二つあるように見えた。薫は一瞬、本当に妖精になった紅子を認識して目を閉じた。

――夢録したい夢を思い浮かべないと。

そこは海。

天気は快晴、日差しはとても強い。

海面は波の揺れで光をランダムに反射させている。

風に乗って潮の匂いが広がっている。

海岸に沿って白いガードレールと車道が伸びている。

アスファルトの上は陽炎が見える。

そのずっと先の丘に風車が風を受けて回っている。

車は一台も通らず、打ち寄せる波の音と風の音だけが聞こえる。

薫は女性と手をつなぎ、堂々車道を歩いている。

その女性は白いワンピースを着て、つばの広い帽子を被っている。

じっとりと汗ばむくらい暑いはずなのに、つないだ手はとても心地いい。

――特に会話はない。それがなくても同じ方向へ一緒に歩いている。相手が好きな人なのかはわからない。歩いても歩いても黙って一緒に歩んでくれるそんな人だ。

――写真を見ているように、この光景は頭から離れなかった。忘れたくなかったあの夢を自分は今、見ている。自覚できている。

――今なら彼女の顔を確認できる。薫はそうっと彼女の足下から目線をあげていく。あのときの感覚が確かなら、その人物は……。

――。

――。

彼女の首まで視界に映る。

――やはり思い出せない。思い出そうとすると頭の中が真っ白になる。

――ただ、こうやって歩いているだけで幸せなこの夢を忘れたくなかった。

さらに視線を上げて、彼女の顔を見る。

――。

――紅子！

子供の紅子ではない。薫と同じくらいに成長した紅子と手をつないで歩いていた。紅子を見てみると目が合った。少し驚き気味の薫に紅子は笑顔を見せた。

パッと薫は目を開いた。白く高い天井が見える。

「夢？」

片方の手に温かい感触があった。薫は手元を見ると、隣で眠る紅子と手をつないでいた。そうか、夢録の……。まさかこの子に手をつながれていたとは……。だから、夢でもあの女性と手をつないでいたのか。いや、元々の夢でも手をつないでいた。それははっきり覚えている。まさかその相手がこの子……。

薫は少し混乱している。

薫はポケットから携帯電話を取り出して今の時間を確認すると、朝の六時半を過ぎた頃だった。確かに夢を見ていたのかと薫は理解できた。

「おはようございます、はなざきサン。先にお目覚めになられていたのですね。素敵な夢を見られてましたね。しっかり夢録できましたので、ご家庭で見られるテープに移してお送りいたしますね」

紅子は起き上がる。彼女の背中には、眠る前に一瞬見たあの羽が生えていた。そして、紅子のおでこからビデオテープが光を放ちながら出てきた。

「え！ 夢録って君の頭の中でしていたの？」

薫は驚き、思わず聞いた。

「はい。これが私の夢録の方法なんです。これにて夢録終了です」

ニコッと笑顔を見せた紅子。

「あ、ありがとう」

もうここに用はない。ここを出て学校に向かえばいい。何も考えず日常に戻ればいいだけのこと。でも、心の中で引っかかる。夢の中の女性がなぜ紅子だったのか。単に夢なのだから気にすることはない。だけど、こう気になっては自分の心が釈然としない。

「志染さんは人の夢の中に入ってこれたりしますか？ 俺の夢の中に入りましたよね？」

唐突に薫は幻想的な質問を投げかけた。

「えっ、あ……んー」

紅子は、意表をつかれた質問にしどろもどろする。この質問の返答マニュアルは用意されてなかったのかと薫は思った。

「その反応からして、俺の夢に入ったみたいだね」

「ご、ごめんなさい。勝手にお客様の夢に入っちゃいけないのに。ごめんなさい……」

紅子は何度も頭を下げる。

「いや、別に怒ってる訳じゃないからいいんだけど。でも、どうして？ いつもそうなの？」

薫は優しく聞いた。

「いつもじゃないです。はなざきサンの夢にすごくきれいな海が見えたから」

「海？」

「本当の海を見たことなく、もっと近くで見たいと思ってはなざきサンの夢の中に勝手に入ってしまった。本当にごめんなさい」

夢の中に入るには、夢に登場している人の誰かになる必要があるとも説明した紅子。その彼女の目に涙が溜まっている。それを見て薫は、なんだろう。ふつつつと沸き上がってくる赤く熱を帯びたこの感覚は……。

薫の心に今まで感じたことのないものが生まれた。自分で心臓を握っているようだ。薫はそれが何なのか考えてもわからない。

「もっと小さい時にお父さんやお母さんと一緒に海に行ったりしなかったの？」

紅子は薫の質問に、首を横に振った。

「お父さんとお母さんはいつも夢録の研究をしてるからどこにも連れて行ってもらったことはない。ずっとここで私の好きな夢を何度も見たり、たまに人の夢を見たりしていたの」

「じゃあ、志染さんは自由に夢を見れたりするってこと？」

「はい。一度夢録したテープを見るの。はなざきサンの夢もここに入れば、見ることができるんです」

紅子は、自分の額を指差した。

「ってことは、ここにあるテープも」

薫は他に並ぶ数々の夢録されたテープを見上げた。他人の夢がどんなものなのか気になる。けれど……。

「ダメだよ。こんな所にずっといちゃ」

薫は強く言った。

「えっ！」

紅子はビクッとする。

「幼稚園や小学校も行ったことないんだろ？」

薫は口早に言うと、紅子は目を見開いて頷いた。

「じゃあ、なおさらだ。こんなところ出よう」

「でも私は出れません。ここで夢録をしないと」

「夢録をしてもらいに来た俺が言う資格はないけど、今君は夢録を……人の夢を見ている場合じゃない。君の夢は他人が見る夢の中にはない。もちろん、俺の夢の中にも。自分の目で見て、手で触らないとわからない。本当の海が見たいなら、今から俺が連れて行ってあげる！」

薫は手を差し出した。

「本当の海……」

紅子の目が変わった。好奇心を抱き、輝いている。

「そうだよ。本当だったら、小学校に通って友達に囲まれて勉強して遊んでなきゃダメなんだよ

。外で走り回ったりしてさ。運動会もあるぞ」

「うんどうかいって？」

「みんなで走って誰が一番速いか勝負するんだよ。玉入れとかもあるな。お昼ご飯はお父さんとお母さんと一緒にお弁当を食べるんだ」

「お父さんとお母さん……」

「そう！ 志染さんにもいるでしょ」

「いるけど、ぜんぜん会ってない」

「会ってないって……。おうちに帰ってこないの？」

紅子は左右に首を振った。そして、

「研究が忙しいって、お手伝いさんが言ってます。それに私が夢録をしてお金を稼がないといけないから……」

「何で十才の子がそんなことするんだよ」

薫は紅子を怒鳴った。紅子は怯え、静かに涙を流した。

「君は悪くない。君は悪くない」

薫は紅子を抱き寄せ、そのまま紅子をかかえて立ち上がった。ここまで来て、引き下がってたまるか。どんな問題が起ころうと俺が責任を取る。

「たかが高校生の男子に何ができるかわからないけど……。本当の海を見に行こうよ！」

「……」

紅子は困った顔をしている。どこの馬の骨ともわからない男にここを出ようと誘われているのだから。それでも……。

「自分の目で見て、手で触ってみなよ。俺の夢なんかで見るよりよっぽど凄いいから！」

「……うん」

紅子は小さく頷いた。はっきりと紅子の返事を聞くと、薫は紅子を抱きかかえたまま自分のスクールバッグを持って出口へ走り出した。スリッパを放り、靴に履き替える。紅子の内履きはそのまま薫はドアを開けて廊下に出た。

突然、サイレンが鳴り響いた。

「なんだ？ 何の警報だ？」

ギンギンと耳が割れそうな音だ。

「たぶん私のこれだと思う」

紅子が袖をまくって腕を見せると、ブレスレットのような金属がはめられていた。

「発信器？ 盗難防止用のセキュリティか。どこまでこの子を……」

このブレスレットがドアを通ると警報が鳴る仕組みだった。それは紅子の誘拐防止のためだ。薫は紅子をかかえ直し、走り出した。

「ここから出られれば何とかなる。あとで、そいつもはずそう！」

昨夜、通って来た廊下を戻って行く。相変わらずサイレンが鳴っているが、誰かが薫たちのところへやってくることはなかった。隣の部屋にいるというお手伝いさんですら、姿を現さなかった。このサイレンは単なる脅しで、実際には機能していないようだ。

紅子のためのセキュリティでも、何でもないじゃないか。どこまでこの子を適当に扱うつもりなのか……。

紅子は落ちないように薫にしっかりつかまっている。背中のオレンジ色をした蝶の羽が風を受けて揺れている。

「お、お兄さん。風が気持ちいい！」

紅子は照れて言った。普段、部屋の外にもろくに出ない正直な気持ちなんだろうと薫は思った。それに「お兄さん」か。妹にするってのも悪くない。ほんの短い時間かもしれないがそうなるのもいい。

「そうか。でも、海の風はもっと気持ちいいぞ！」

薫は朝の光が差し込むガラス扉を開けた。外に出ても薫は走ることをやめなかった。

「という流れで、志染紅子は俺の新しい妹になりました」

すでに朝食を食べ終わった薫が満足げに話し終えた。

「へー。かなり過激な展開ね。映画みたいでちょっと憧れるな。無理矢理連れて行かれるのは、その続きはないの？」

牡丹は興味津々だった。

「続きは今のところないです」

「今のところ？」

「はい。もし、俺がここを出ることができたら紅子をちゃんと海に連れて行ってあげるつもりです。紅子には兄弟もいないので、まずは黄柚子姉さんと稲穂お姉ちゃんと仲良くなってもらいたいと思ってます」

「二人のお姉さんか。それと薫お兄さんも。なんだか賑やかになりそうね」

牡丹は笑顔で薫の話に合わせた。ティッシュ箱にちょこんと座る紅子はしっかり兄の薫の話を聞いているようだった。こんな話をしていると実際に蝶の羽を生やした女の子たちが薫君の元で生活し始めてしまうのではないかと牡丹は想像した。いつの間にか、紅子は部屋中を飛び回って、薫君やお姉さんたちに静かにしていなさいと怒られているのも面白い。きっと薫君もそんな光景を思い描いているに違いないと、真剣に妹と接する薫を見て思う牡丹。

「それじゃ、朝食を下げろわね。ごちそうさまでした」

牡丹が言う。

「はい。ごちそうさまでした」

薫は妹の前で両手を合わせて言った。

「ちゃんと歯をみがいてね！」

「はい。わかってます、牡丹さん」

「わかっていればよろしい」

牡丹は笑顔で薫の病室を出て行く。その間際にもう一度薫を見た。

「心配いらないよ。大丈夫。牡丹お姉さんは優しいから。何でもお話聞いてくれるんだ。今度は三人で話そうね」

薫は紅子に向かって話をしてた。当然ながら紅子から返事はない。私には聞こえない。でも、牡丹お姉さんという響きは悪くないかもね。また彼と距離を縮めることができたのかも……。

薫の病室のドアが閉まった。

「おはよう！」

朝、そう言ってスライド式のドアを開けて薫の病室に入って来た牡丹。病室のカーテンは閉まったまま。外は雨が降っていることもあり室内は暗い。牡丹は朝食を乗せたトレイを持ちながら、まだ寝ている薫のベッドに近づいていく。いつになく布団がきれいに整えられていることが牡丹は気になっていた。

「薫君？」

牡丹はベッドの脇まで来て、薫が布団の中にいないとはっきりわかった。トイレに行く程度でまたすぐ戻ってくるのであれば、ホテルのベッドメイキング並みに布団を整えることをまずしないだろう。布団の中にダミーを入れて膨らます子供だましのようなこともしていない。牡丹は不安を抱いた。

ベッド脇の台の上にいつも置いてある標本ケースはない。昨日、紅子がちょこんと座っていたティッシュ箱が台の上にあるだけだった。コレクション化しつつある標本ケースは、薫君が持っていったに違いない。

患者が勝手に病院から外に出られないはずだし、院内のどこかをうろついているのだろうか。朝食の時間にうろついている人がいれば、見つけた看護師が連れて来てくれる。

牡丹はほんの少し病室で薫を待ってみた。しかし、薫は戻ってこなかった。

「お兄さんもモノ好きだね。今、せりか島に行きたいなんていう人は誰もいないよ。本島の島民でも行く機会はほとんどないよ」

中年をとうに過ぎ、陽に焼けた真っ黒肌の漁師が小型漁船の舵を取りながら言った。

「さっき、あの島を本島から初めて見た時、呼ばれた気がしたんです。それでどうしても行ってみたいと思って……」

半袖のシャツを肩までめくった白い肌は赤くなっている。大きなリュックサック一つ背負った薫が目を輝かせながら、正面の島を見ていた。本島から船で十五分はかからない距離で、離れ島のせりか島にもうすぐ船は到着する。

「島に呼ばれたって、変わった兄さんだな。せりか島に行っても何も無いぜ。いくつか民宿や民家があったが一人を除いて誰も住んじやない。そいつを見かけても関わらないでいた方がいい」

「一人？」

「ああ。お兄さんと同じ高校生だよ。時代の流れで本島ないし、本土へせりか島民は移っていった。でも、あの女の子だけは離島することを拒んで今でも一人住んどるよ。水も電気も通らなくなって、もう三ヶ月になるな」

「……」

薫はだんだん大きくなっていく島を見上げる。島の中心に行くほど山は高くなって木々に覆われている。夏の陽が、葉をより緑色に魅せている。

「今じゃ、島に取り憑かれた子だの、島民の帰りをけなげに待つ犬と呼ばれるようになってな。少し経てば、生活できなくなって島を出るようになってたがな……」

「なおさら興味が湧いてきましたよ。きっとこの島に惹かれているんですね。島から離れられない理由が知りたくなってきた」

「ははは！ 変わったお兄さんだな。だがな、あまり深入りしない方がいい。島には島の決まりみたいなもんがあるからよ」

漁師は笑って言っていたが、逆に忠告をしているように薫には聞こえた。

「はい。その辺りはわきまえておきます」

薫はしっかりと返答しておいた。

――そう。

――どこに行っても、環境が変わろうと、この国はそうだ。人々も……。

――規範からはみ出る者を嫌うのだ。

――見えない規範を作り、知られたくないことも好きなようだ。

船は、元々港だった所に接岸した。薫を下ろすと、漁師は湯が沈む前にここに迎えに来てやるからと言って、本島へ戻って行った。船のエンジンが聞こえなくなると、穏やかな波の音と心地よい風の音だけが聞こえてくる。

辺りを見ると廃屋が建ち並んでいる。人が住まなくなるだけで、建物はこんなにもさびれてし

まうのかと薫は体感した。島の円周に沿って続く船着き場の先に、少し高くなった防波堤があった。その上で両足を海に突き出して地べたに座っている女の子が一人いた。薫はさっき漁師が言っていた人だと思った。他に人はいない。背負ったリュックを軽く持ち上げるようにして背負い直した。女の子の方へ歩いて行く。

すると、その女の子は、薫が近づいてくことに気づき、その場に立ち上がった。白いワンピースに襟首に青いスカーフを巻いていて、飾りのない麦わら帽子を被っている。島に取り憑かれた一人残る女の子の服装ではないと思った薫。この暑い季節に水や電気のない島の生活には不向きな格好。Tシャツに短パンと行動しやすい格好を想像していた。

「君が、一人で島に残って――」

「私は、私の背中を押してくれる誰かを待っている」

海を眺めている女の子は、微動だにせず薫の言葉が言い終わる前に話し出した。

「……」

薫は一瞬、何も考えられなかった。何を言っているの、この子……と。

薫は彼女の細くなった足元を見て、その意味をすぐに理解した。でも、どうしたらいいか……

この島で一人になってから満足に栄養が摂れていないのか、スラッとした足がさらに細くなっていることが見てわかる。その両足が自由にならないように、足首の所をロープで縛ってあった。そのロープの先をたどっていくと二つ重なったコンクリートブロックに結ばれていた。そのブロックの先端は海に突き出していた。

――自ら海に飛び込む勇気がないってことか。

「あなた、私の背中を押してくれない？ 誰も見てる人なんていないから……」

無表情かつ無感情に女の子は言った。てっきり何かに取り憑かれたように島を愛して残った格好いい女の子と思っていたのに、そうは思えない。そして、自ら死を願うもその心と行動は釣り合っていない。死への一歩となる一押しを他人に求めてどうなる。俺はわざわざそんなことをするために都会を離れ、島に来た訳じゃない。

しかし、薫は躊躇することなく彼女の背中を押した――。

手に取ってわかる肉付きのない細い体は、簡単に海面の上に放り出された。その子は、うわっと言驚いていた。一息はできる間が空いて、バシャンと海に落ちた。女の子は無駄に手足を動かすことなく海中に沈んでいく。足につながれたロープとともに……。

彼女の沈む所から白い気泡が上がって、海面に出てくるとパチパチ割れていく。海中からさら白いものが見えた。それは沈んでいくはずの女の子が浮かび上がってきたのだ。女の子は呆気にとられた表情で薫を見ていた。

薫は笑った。

「ごめんね！ 自殺の手助けなんて勘弁してくれよっと！」

そう言って薫は、ロープでつながれていたはずのコンクリートブロックの一つを持ち上げてみせた。

「結び目、緩かったから海に引っ張られる前にほどいちゃった」

薫は海面に近い所まで降りて行き、女の子に手を差し伸べる。

「この島に一人で残ってるって聞いたよ。少し話を聞かせてよ。できれば、俺も今と違った形で君の背中を押したいからさ」

女の子の家は、船着場から坂を登った途中にあった。一軒家だった。女の子は着替えて出て来た。

「やっぱりね！ 絶対そうだと思ってたんだ。ワンピース姿も良かったけど、島スタイルはその格好がいいよ！」

薫はTシャツ、短パン姿に麦わら帽子を被った女の子を見て言った。

「あ、ありがとう……」

「麦わら帽子好きなの？」

「子供の頃からずっと被ってるから。被ってないと落ち着かないの」

「へー。あ、俺、花咲薫。十七才。高校二年」

「私は、屋久島るみ。同じ十七才。でも高校には行ってない。って、見ればわかるよね」
るみは苦笑いをした。

「この島を案内してよ」

「観光になるものなんて何もないわよ」

「それでも、屋久島さんはこの島、せりか島って言うんだっけ。この島に一人残ってるのはそれなりの理由があるからでしょ。それも教えて欲しいな」

「るみでいいわよ、薫君！」

軽い口調で言うと、るみは坂を下り始めた。薫は彼女の後を追う。

「では、改めて。るみはどうしてこの島に一人で残ったの？」

「簡単な話よ。私はここが好きだからよ。生まれも育ちもここ」

「それは、離れていった島民皆そうじゃないの？ 家族だって出て行く方がつらかったでしょう」

薫は問うた。

「それはどうかな。一斉離島が決まった時、皆喜んでいたら。つらいも何もなかったと思う。私は離島するの嫌だって言ったけど、両親は私を何度も説得したわ」

「みんな、この島が嫌いだったから？ 単純に住みにくいからとか？」

「後者の理由もゼロではないけど、本当にこの島が嫌いなのよ。こっち」

二人は先の船着場まで戻って来た。るみは、島を周回する道を案内した。薫は坂道を下っただけで汗だくになっていた。高い気温とアスファルトの照り返しが薫を襲っていた。るみは慣れているのか、さほど汗はかいていなかった。時々、潮の香りを運んでくる風が体を冷やしてくれる。

「島民全員がこの島を嫌いなる理由って？」

「島民だけじゃない。本島の人たちもこの島を嫌ってる。その訳は、島の名前の由来。島の反対側に行けばわかる」

「今、そっち向かってる訳だ」

「ええ。でも、そっちは後でね。先に私がこの島で大半を過ごす場所へ案内するわ」

るみは、脇道から林道へと入っていった。林道は、木々によって太陽が遮られていて涼しく感じる。しかし、上り坂が続く薫の息はすぐに上がった。

「ここ」

るみは立ち止まって、息を切らして後からやってくる薫に言った。薫はハァハァ言いながら顔を上げると、林の一部が開け、畑があった。

「何か育ててるの？」

ほとんどの土は乾ききって風が吹けば土埃が舞うほどだ。

「ミニトマトときゅうりだけ。他は全然育たなかった」

るみは、実の様子を見る。まだ小さく青いものもある。

「自分で耕したの？」

「まさか。もともと畑として使われていた場所。だいぶ使われていなかったみたいだけど。試しに種を蒔いてみたの。実際、成長しているところを毎日見ると楽しいのね。私はこういう生活の方が向いているのかもしれないと勝手に思い込んでる」

「トマトときゅうりだけじゃ、満足した食事にはならないんじゃない？」

細身のるみを見て薫は言った。

「そうよ。毎日、数が取れる訳でもないし。水まきもほとんど天候まかせ。こんな島でも、今までいかに贅沢な生活をしていたのか痛感した。結局、週一回本土にいる家族から水や食料の仕送りに頼ってる。この島に残っても何も成せていない。私は無力。それでもこのトマトやきゅうりは育っていて羨ましいって思う。植物にこんな気持ちを向けるのって変でしょ」

るみは冗談ぽく言って笑ってみせた。

「いいと思うよ。むしろ、俺はそういう方がいい」

「……」

るみは薫の返答に呆気にとられた。

「意外。そんな人には見えないけど。こんな島に一人で来たくらいだから中身は変わり者なのかしら」

薫はるみに返す言葉はなく、苦笑いをした。

「寄り道しちゃったわね。戻りましょう」

二人は来た林道を下り、元の道路に出て、島の反対側へと向かって歩き出す。山側から木の枝が道路上に迫り広がって所々日影になっている。薫は慣れない気候にバテて、持っていた水を飲む。るみに大丈夫かと聞くと大丈夫だと返ってくる。それと一緒に「男子のくせに体力ないのね」と馬鹿にされた。

薫の歩く速度に合わせて、るみは隣を歩いている。

「薫君。今度は私から質問してもいいかな？」

「いいよ」

「どうしてわざわざこの島に来たの？ 見ての通りだし、よく本島の人に船を出してもらえたね」

」

「めちゃくちゃ漁師の人に頼み込んだよ。本島に着いてすぐ、一目せりか島を見た時、島に呼ばれた気がしたんだ。おいでって。いてもたってもいられなくなってさ。もう、本島の観光どころじゃい。この島にすれば、呼ばれた理由がわかるかもって思った」

「たったそれだけの理由で？」

「そうだよ。もしかして、るみが呼んだのかも？」

「ふふっ。それはどうかしら。ロマンチックではあるけど。そんな偶然のようなロマンを求めて旅行に来たの？」

「心の隅にそういう気持ちは少なからずあったけど、本当は自分の住んでいる所が嫌で出て来ただけなんだ」

薫の表情から笑顔がなくなった。

「どんな所に住んでるの？」

るみは問うた。頭の中で本土の土地を思い浮かべる。

「おおざっぱに言えば都市部」

「都会っ子ってやつね。私の友達も皆、都会に憧れて島を喜んで出て行ったけど」

「それはそれでいいと思う。単純に俺の心の問題なんだ。コンクリートの上にビルやマンションがあって、その隙間を這いつくばって歩く人混みが好きじゃない」

「そういうのって慣れるんじゃないの？」

「んー、どうかな。子供の頃から今でもそこが生活の場だけど、良い所とは思えない。都会にはない、この大自然に囲まれていたいっていう気持ちの方が大きい」

薫は吹く風を浴びるように両腕を広げた。

「それは、単に薫君のないものねだりよ」

「えっ？」

薫はるみに意表を突かれ、上げていた腕が自然と下がった。まるで犬のしっぽのようにしゅんとなった。

「本当は今の生活に満足していて、新しい気持ちに触れたいだけ。都会から離れて来たと言っても、時間が来ればそこへ戻るんでしょ？」

「……そうだけど」

「離島した友達は高校受験の時、単に本土や都会に行きたいという仮の理由を作って高校を決めていた。軽い気持ちで憧れても、前に進めやしない。その場の環境や流れに打ち勝つくらいの気持ちがないとダメ……だと思う」

るみは強く言い過ぎたなど、言ってから思った。

「るみの言う通りだよ。俺もそう思う。この旅、いや旅行だって計画的に帰ることも考えている。その時点で逃げているようで逃げてすらいない。その点、るみはそれを貫き通そうとしているから素敵だと思った」

薫の目は真剣にるみの目を見つめていた。

「……そう」

るみは肯定とも否定にもとれるように答えた。

「こうして、ここへ来なければわからなかったけど、るみと出会えて良かった。出会えてなかったら単なる旅行で終わっていたよ」

薫は微笑んだ。

「まさか、このまま島に残るとか言い出さないよね？」

「帰るよ、ちゃんと。俺なりの切り口で今の生活を見つめ直すつもり」

「そう。良かった。その方がいいよ」

るみは肩をなで下ろした。

「どうして？ 俺に残って欲しかった？」

薫は冗談めかして聞いた。

「いいえ。もし、残るって言ったらこの島は、やっぱり癖のある島なんだって私が納得してただけ。その理由がこれよ！」

るみが指差す先、歩いて来た道路を挟んで山側の中腹から海岸にかけて無数の墓石が建ち並んでいた。最近のものではなく、ずっと昔からそこにあり、ほとんどが雨風や海水で風化し、丸みを帯び表面は荒れていた。そして、台風が過ぎ去った後のようにボロボロの木クズが何層にも積み重なっていた。それらが海水をかぶり海岸側から異臭が生暖かい空気と混じって漂ってくる。一部に小虫の大群が黒い固まりのように群がっていた。荒れ果てた廃墟を見るよりおぞましかった。薫は船着場からこの光景は想像できなかった。

「せりか島。せりかを漢字で書くと、世を離れ下る島。それで世離下島」

「世離下……島……」

薫は復唱した。

「昔。と、いってもいつなのかわからない昔。本土で暮らせなくなった人が世間を離れ、船で下って住み着き始めた島らしい。でも、ある時を境にしてその人々は死んでいなくなる。誰もいなくなるのにどうしてお墓があるのかよくわかってない。と、言い伝えられている島よ、ここは」

匂いで顔を歪ませている薫を見たるみは続けて、

「さっき、薫君が島に残るって言ったら、この言い伝えが本当なのかもって思うところだったんだけど。今のところそうじゃないようね。もしかしたら、世の中から離れたい薫君をこの島が呼び入れたとしたら、それが事実になりそうね」

と、るみは笑って薫をからかった。しかし、薫は笑えなかった。

「もし、るみがこの島にいなかったら……」

薫の声は少し震えている。

「この島にとどまり続け、ある時を境にして誰が作るお墓の一つに薫君が入っていた」

るみにそう言われて、薫はつばを飲んだ。

「るみは命の恩人」

「ふっ。そんなの大袈裟よ。薫君、もともと帰る予定だったんだから。言い伝えみたいなことにならないよ」

「そうだよね……」

と、薫は笑ってごまかす。

「意外と臆病ね、薫君。やっぱり、都会っ子って感じがする」

薫はため息をし、俺って、やっぱりそうなのかあと思った。

「あと、最後にもう一つ私が好きな所を見せてあげる。着いて来て」

るみは、山の中へと続く道を歩き始めた。お墓の真ん中を突っ切って林道へと入っていく。また登るのかと薫はため息をついた。海水を浴びた木クズの異臭を嗅ぐよりは良いか。るみの後を遅れないように追っていく。

林道を登っていくうちに、あの異臭はしなくなった。山の中まで風に乗ってこないようだ。呼吸をするたびに空気がおいしいと思えるほどだ。

頂上に着くまで二人の間に会話はいっさいなかった。林道を歩く足音と風で揺れる葉の音。遠くに波の音。それらが薫の荒い呼吸の音と入り交じる。頂上には十分ほどで到着した。頂上には、鳥居がありその先に百葉箱サイズの神社があるだけだった。先に着いていたるみは、やっぱり都会っ子ねと言わんばかりの表情で薫を待っていた。

「はい、お疲れさん！」

でも、るみの言葉に嫌みはなかった。薫は息を切らしながら、持っていた水をはがぶ飲みした。るみは薫の呼吸が落ち着くまで待っていた。薫は上がった息を整えると、海を見ているるみの隣に並んだ。

「ここからの眺めはいいね。海が輝いて見えるね」

薫は言った。

「夕方になると黄金に輝く海に見えるよ」

「るみはずっとこの景色を見ていたんだね」

「そう。それにこの木」

るみは周囲でも一番太い木を触った。

「このせりか島にしか生えない木なんだ。せりか島木っていうの」

薫もその木に触った。幹に腕をまわしても一人では届かない。

「きれいな木だ。とても硬そう」

薫はコンコンとドアをノックするように拳で木を軽く叩くと、音はほとんど響かず、ぎっちり中身が詰まっている感触を覚えた。

「このせりか島木が、島で一番大きな木。ある時、この木は根元すら残らないほどの爆発をしてバラバラに砕け散るんだって。それがさっきのお墓にかぶっていた木クズよ。砕け散った大半の木クズはお墓の方へ飛んでいくみたい。もう六十年は爆発が起きてないの。いつか私はその爆発の瞬間を見てみたいと思ってる」

「へえー。それは神秘的な光景だろうな。そうやって種子を遠くに飛ばそうとしているのかもしれない」

薫は高く伸びる木を見上げた。

「言い伝えによれば、爆発する寸前にこの木自体が女性の叫び声のような音を出すらしい。木全体に細かいひびが入る音なんじゃないかって言う人もいるけど真相はわからず。島民にとって気

味悪いことには変わらないんだけど」

「俺もその瞬間を見たいな」

「じゃあ、島に残る？」

「そうしたいけど、やっぱり現実を考えると無理だね。電気や水がなく、自給自足も満足にできないし、その術を持っていない。俺はそう思うし、るみもそうでしょ？」

「そっ、それは……」

るみは否定できず、うつむいた。

「だからって、私は島を出て行ったりしない。自分一人で生きてみせる。この島の歴史を私は終わらせない」

薫の瞳に、強い眼差しのるみが映った。けれどその細い体では、薫を説得させるほどの力はなかった。

「本当は、その体じゃ無理だってわかってるんじゃないの？」

「……」

「るみ。一旦、この島の歴史を止めよう」

「今日来た薫君に、十七年間この島に住んでいる私の何がわかるの？」

るみは語気を強めて言った。

「とうてい全部はわからない。でも、るみは海に落ちたいがために背中を押して欲しかったんじゃない。この島で一人生きる勇気をもたらすために背中を押して欲しかったんじゃない。本当は誰かに背中を押されて島を出たかったんじゃないの？」

「――そんなことあるわけない、絶対」

るみの目に涙が溜まっている。次の瞬きをすればこぼれてしまうだろう。薫はその言葉がるみの本心の裏返しだとわかっていた。

その時――。

小さな神社の扉が開き、真っ青の羽の蝶が出て来た。青白い光に包まれた蝶はヒラヒラとるみに向かって飛んでいく。るみの目の前でパッと消えると、るみの背中に先の蝶と同じ真っ青の羽が生えていた。そして、るみが青白く光り出した。

「何、これ……」

るみはパニック寸前だった。

『最後の島の民よ。お主の気持ちは十分に伝わった。一人になったお前をずっと見ていたぞ』

二人の心中に直接響き渡る声。

「えっ、誰？」

るみは周りを見回すが、薫以外誰もいない。薫も辺りを見回している。

『この島の主と言えばわかりやすいか』

「この島の……」

るみは扉の開いた神社を見つめた。

『悪いが、お前がこの島で朽ち果てる姿を見たくはない。聞く耳をまだ持っているなら、少年の声に耳を向けなさい』

るみの脳裏に倒れて死んでいる自分の姿が鮮明に浮かんでいた。島の主が見せたものではない。るみ自身が頭の片隅で描いていたものだった。

るみは薫に視線を向けた。

「薫君……」

「るみと出会って、これから自分が何をしなきゃ行けないのかずっと考えてた。でもわかった」

「それは何？」

「るみさえ良ければ、この島を人が住める島にしよう。お互い勉強してこの島で生活できる力をつけてこよう。るみが島を離れてしまえば、せりか島の歴史は止まる。でも、またここに戻ってくることができれば、せりか島の歴史はまた刻まれ、止まっていた間もまた歴史の一部になる。るみが歴史を止めてしまうことになるけどまたスタートさせるのも君だよ」

薫の話を聞いている途中から、るみは涙をポロポロと流していた。一人この島に残ってから何度も寂しさを感じていたけれど、自分の意思を貫き通そうと泣くことを我慢してきた。今、溜め込んでいた分の涙をるみは流していた。

「薫君……」

薫はるみの肩にそっと腕を回した。

『島の民と少年よ。握手をかわせ。それをこの島での再会の契りとする』

島の主の声が響くと、るみと薫は握手をした。

『では二人に契りの印を残す。もし、どちらかが契りを破った時、二人に罰が下るだろう』

握手をする手に青白い炎が上がる。一瞬の熱さを覚えたが、二人は手を離さなかった。

『この島で、また二人とお目にかかれることを切に願っている』

この言葉を最後に島の主の声は聞こえなくなった。そして、るみの背に生えていた蝶の羽は光の粉となって消えていった。握手をした二人の手の平には蝶の片羽が描かれていた。

「これで俺たちは運命共同体になった訳か」

薫が言った。

「そうね。よろしく」

るみが言った。

二人はそれぞれの場所で成長することを誓った。

「せりか島の由来を新しく作りたい」

「どうするの？」

「世を離れて住みたくなるような華やかな島で、世離華島って、どうかな？」

「そうなるよ。絶対」

「絶対、そうして見せるね。薫君」

夕方、薫を迎えに来た小型漁船の上で、るみと薫は話をしていた。

夕陽の光を反射した黄金の海を船が島から離れていった。

「どう？ 体は温まったかな、薫君」

病室のベッドで、下半身だけ布団をかけて座る薫に牡丹は声をかけた。薫は両手でガラス板がはめ込まれた標本ケースをじっと眺めていた。真っ青の羽一それは片羽だけ一をつけ、Tシャツと短パン姿の女の子が増えていた。

朝食の時間に病室にいなかった薫は、まもなくして雨の降る屋上で見つかった。雨に濡れた薫をすぐにお風呂に入れて、いつものように事情、いわゆる薫の夢ないし空想を聞いて今に至る。

外へつながるドアの施錠は特に徹底して指導されているはずにも関わらず、今朝に限り屋上のドアの鍵だけはされていなかった。幸いにも、屋上に出ていたのが薫君で良かったと牡丹は内心安堵していた。近頃の薫君は、落ち着いていたし、早まった行動に出ることはないと思っていたからだ。これが薫君ではなく、他の患者さんであったらどうなっていたらだろうか。ただ、重度の患者さんはそう簡単に出歩けるようにはなっていないのだが……。

「汗をかいたからって、わざわざ雨を浴びにいかなくても私に言ってくればお風呂に入れてあげたのに」

薫は牡丹を見ていないが、牡丹は笑顔で言った。

「目が覚めてすぐ汗を流したかったんです。いつもの熱いタオルで体を拭くだけだとスッキリしないと思って……」

「もう次からは遠慮しないで言ってよ」

せめて病室からいなくならないでと、続けようかと思ったが牡丹はやめておいた。

「んー。それは牡丹さんに一方的で申し訳ないというか……」

薫は顔を下に向けているせいか、かなり遠慮しているように見える。

「はいはい。そういうことはここでは言わない。むしろ、薫君が遠慮しないで色んことを言うための場所でもあるのよ。思う存分、私を頼りにすればいい！」

と、牡丹は自分の胸を叩いた。以前にもこんなやりとりをした記憶があるなと牡丹は思っていた。すると薫は顔を上げて牡丹を見た。

「ええ、適度にしておきます。あれこれいうと牡丹さん、ぐちぐち言って怒るし……」

笑顔の薫が言う言葉は、冗談ではなく本音に近いので、牡丹は心にとげを刺されているような感じだった。

「それはそうでしょう。朝、病室にいないんだもの。誰だって……。少しは反省してよね」

牡丹は語気を強めて言った。強めずにはいられなかった。

「そうですね」

「薫君だって、そのるみって人を放っておけなくて心配だったんでしょ。たぶん、それに近いことだと思うよ」

牡丹はガラス板の中で、麦わら帽子を被った片羽の女の子を見た。

「誰かと一緒に前に進みたいと思っていたんだと思います。やっぱり一人だと心細いというか。お互いに頼りにできたら、最高です」

薫は、片羽の紋様が描かれた自分の手の平を見つめた。

薫君。私もあなたと一緒に前に進みたいと思っているのよ。薫君だって、一人で心細いでしょ。私を頼りにしてくれてもいいのに……。でも、なぜかしら。いつも見ているのは、その子たち。私ではない。

牡丹は心の中で薫にそう語りかけていた。

「おはよう！」

朝、そう言ってスライド式のドアを開けて薫の病室に入って来た牡丹。病室のカーテンは開いていた。薫は窓の外、今日も雨の降るどんよりとした空を見上げている。牡丹の挨拶に薫の返事はない。私の声は聞こえているはずだけど、たぶん返事をする気分ではないのだろうと、牡丹は薫の後ろ姿を見て思った。

「朝ごはんだよ、薫君」

牡丹は朝食を乗せたトレイをテーブルに置いた。やはり、薫の反応はない。牡丹は薫の隣に立って表情をうかがった。

「何、見てるの？ 面白いものあった？」

薫は無表情だった。視線は雨を降らす雲二向いているようだが、視点が合っていないような気もする。当然のことながら、薫が何を考えているのかわからない。日に日に薫君の感情がわかり始めたのに、こうも静かになると逆に怖いなと薫と距離感を感じた。牡丹は少しの間、薫の隣で一緒に窓の外を見ることにした。灰色の雲が広がる下には、林が広がっているだけだ。晴れていれば、鳥が飛んでいる姿もちらほら見ることもできるが、今日は全く見れないだろう。薫の心は灰色に染まってしまったのか。自分もその色には染まりたくないと思えば、少しでも明るくしていようとした。いつの間にか鼻歌を歌っていた。

「牡丹さんは、月を見てロマンを感じたりしますか？」

唐突に薫が質問を投げかけて来た。

「んー、正直、ロマンは感じないかな。きれいだなって思ったり、やっぱりウサギに見えるって思うことはあるよ」

「他には？」

薫がさらに聞く。あまりそこまで月を意識したことはなかったし、薫君は私にどんな答えを求めているのだろうか。持ち合わせている知識は小中学校で習う程度のこと。それもずいぶん抜けているような気もする。

「そうだな。私だけかもしれないけど、月の満ち欠けを見て自分の体調を考えたりする時はあるよ。って、薫君にはまだわからないかな」

「……」

薫の反応はない。私の言葉がわからないんじゃない。期待していた答えではなかったからだ。「昔も今も、人は月や宇宙に未来を求めていたんですよね？ でも俺はそう思えない。単に政府が戦争の矛先を未来という言葉を使ってすり替えたようにしか見えません」

牡丹は薫の言っていることがあまり理解できなかった。ここへやってくる前に授業か何かで学んだことなのだろうか。

「つまり月や宇宙へ行くことも戦争なんだってこと？」

私は戦争という言葉にピンと来ない。

「はい。見方の問題と言われればそれまでですが、地球を離れる距離に比例してその技術は高

まり、その進歩はあらゆる物を生むんです」

「まあ、確かに。でもそれで私たちの生活は豊かになる訳でしょ」

「おそらく大半の人の生活はそうなると思います。現に自分がこういう所にいられるのも多かれ少なかれ、その豊かさの中にいるからだと思います。しかし……」

「しかし？」

「見えないモノまで見ようとして、そればかり気にしてると俺みたいになってしまう……かもしれません。だから、ここにいるんだと思います」

「……そうだね」

牡丹は笑顔で頷いた。

「時間が進めば進むほど、見えるモノは増えていく。遠く離れた星や宇宙。ましてや人の心もです。そこに何があるって言うんでしょうか。希望なんて言葉にすがりたくない。欲望だけで満たされた未来なんて見えない方がいい。でも考えたくもないのに、それを考えてしまうんです。この子たちをどうしたらいいのか。俺はどうしたらいいのだろうか」

薫は手を広げると、蝶の羽を生やした女の子がいた。幾何学模様の描かれた白いワンピースを着ていた。まるでアイドルのように見える。アゲハチョウと同じ形の羽は、白色。下の左右の羽だけ複雑な模様一木々を下から見上げて葉と葉が重なり合ってはいるが、所々の隙間から空が見える一だった。表側も同じ模様なのだろうかと牡丹は気になったが、女の子は仰向けの状態で羽を広げていたのでわからない。

「この子たちは、心に張られた蜘蛛の巣に捕まってしまった。俺は心に蜘蛛の巣なんて仕掛けたつもりもないのに。断ち切ってあげた方がいいんですかね？ そのからまった糸を」

「もし、薫君が彼女たちの状態だったらどう思う？」

「俺もすでにこの子らと同じ状態なんです。糸がからみついてもがいているんです。とはいっても蜘蛛の巣から離れたいのか、そのままにいる方がいいのか、わかりません。俺にとって、ここも蜘蛛の巣ですから……」

薫は病室を見回した。今は使われていないベッドが3つあるだけ。

薫は長いフライトを終え、「静かの海」空港の待ち合わせ場所に一人いた。空港は多くの人たちで賑わっている。初めての月なのか地球より小さな重力を楽しんで忍者のように飛び跳ねている人もいれば、その重力に違和感を持ち、気分を悪くしている人をたまに見かける。

俺は今回で三度目の月。小学生の時に家族旅行で一度来て、中学の修学旅行で二度目。そして、十七才にして三回目の月旅行。この年で三回は多い方だ、一般的に。しかし、今回の月旅行、いや仕事……よくわからないが旅費全て相手持ち。それに報酬金すらついてくる。人助けをして欲しいとのことだ。ただ詳しい内容は現地で説明すると言われた。あやしいとは思いつつも、社会から信頼ある企業Gaiax（ガイアックス）社からのお願いでもあったから引き受けた。

俺はベンチに座りながら、目の前を浮遊する半透明のホログラムを見ていた。

〈現在、月では『iMagi+CA』は有効圏外のため使用できません。ご不便をおかけしまして申し訳ございません〉

という文字列と、車の標識のように斜線の引かれた『iMagi + CA』のロゴが表示されていた。

静かの海都市も小さな国並に発展したんだからiマギ使えるようにしてくれてもいいのにと、薫は広々とした空港を見回した。LCL通信しただけでこんなに頭の中が静かになるとは思わなかった。むしろE-SNSやSelicaからの情報が入ってこない方が不安になるくらいだ。

『iMagi+CA』（iマギカ=略称iマギ）は、ガイアックス社が開発した人間が発する思念を取得処理するシステムである。ヒト意思を解釈できる画期的なシステムで、思念とWorld Wide Webを接続可能にした。事実上、『iMagi+CA』がウェブと人そのものを取り込んだ形となった。これにより人はデバイスを介することなく、『iMagi+CA』とつながりたいと思うだけで接続が可能だ。

また人は思念を発すると同時に思念光というものを発生させることを発見した。これは人には見えないが、『iMagi+CA』は、それを目印に通信を実現する。その際、『iMagi +CA』からLCLというものを発し、思念光と『iMagi+CA』を中継する。これをLCL通信と呼んでいる。思念光の波長は一人一人ユニークで『iMagi+CA』はそれを個別IDとして認識する。

『iMagi+CA』の登場により人はデバイスを介さずに、頭の中でウェブを利用することが可能になった。以前はWeb10.0と呼ばれていたが、大きな飛躍を遂げたことで業界内ではWeb13.0と数字を上げていた。一方の世間は『iMagi+CA』に一目置いていたため、iMagi1.11時代などとマスメディアが広めていった。これにともない、インターネット上にあったSNSはiマギの中に場所を移し、思念を通すSNSはより自分に近づく形となった。進化形SNS（E-SNS）ともてはやされることになった。

このE-SNSは、以前までの文字や音声、映像などのメディアだけでなく、心・思念すらも共有することが可能になった。しかし、思念の情報量が爆発的に増えたことで多くの問題が指摘されてもいた。

ネット上の情報は、「十八禁」と「猫」が大半を占めていると言われていたが、iマギが登場してからはその二つに「思念」が加わった。これにより人の頭の中で思いめぐらせていたはず

の「思念上の十八禁」がi マギを駆け巡り、特に女性や子供に影響を与える問題となっていた。

薫はガイアックス社の人間に連れられ、移動することになった。場所は月の裏側と聞かされたが詳しいポイントまでは教えてもらえなかった。静かの海空港から専用機で移動したが、月の裏側は数千メートル級の大小数々のクレーターや山がそびえ立ち、同じような地形ばかりで場所を覚えようがない。専用機はあるクレーターの中へと降下し、薫は地下施設へと案内された。

そして、机とイスだけがある会議室に通された。当然、直接外を見る窓はなく、疑似窓には宇宙が映し出され、星がゆっくり動いていた。この視覚効果もあり、地下にいる感覚は薄れた。そこでしばらく一人で待っていると、別のガイアックス社の担当者が一人手ぶらでやって来た。好青年の研究者だった。

「初めまして。レリエル実験基地DDD（トリプルD）開発部の雨宮早太です」

「花咲薫です」

——ここはレリエル実験基地っていうのか。

「Lベース。通称、そう呼んでいます」

雨宮は意味深な笑顔を浮かべた。

「えっ？」

薫は自分で思ったことが雨宮に伝わっていたことに驚いた。

「ごめんね、驚かせて。このLベースでは、i マギが使えるんだ。一時的に花咲君も使えるようにするから。……はい、どうぞ」

雨宮が言うと、薫の頭の中に滝のような情報が流れ込んで来た。友達の思念、E-SNS、各ジャンルのニュースや参加しているゲーム世界など。しかし、薫は違和感を感じていた。

「気づいたかもしれないけど、特殊なLCL通信を使っているから、花咲君は情報取得しできないようになっている。ここは未公開の基地で、情報漏洩させないためだから、ご了承下さい」

「はあ。それはかまいませんが、一体俺は何をすればいいんですか？」

すると、i マギを通して雨宮から資料が送られて来た。ネットアイドル「ホワイト・キャンバス」絶対零下予言思考少女サルベージ計画という長いタイトルだった。そして、赤字で大きく極秘と印字されていた。

最近現れないと思っていたけど、ここにいたのか。でも、サルベージってどういうことだ。セリカ内でも彼女が消えて事件に巻き込まれたとか、普通の女の子に戻ったとか色々噂が絶えない。

ホワイト・キャンバス—国内のネットユーザーで知らない人はいないくらいの人気ネットアイドルの名前だ。この名前を知ったのは、Selica（セリカ）というネットサービスに登録したことがきっかけだった。セリカは文章・絵・写真・動画などをネット上で作成でき、またアップロードして交流するサイトである。チャットや音声会話もでき、一般ユーザーだけでなく仕事としても使用され始めたことで次第にユーザーが増えていった。またネット上であらゆる作品を制作できるため一部のクリエイターや一般ユーザーが創作交流しながら、新しい作品を作っていた。ユーザーが増えることに比例して、作品数も数を伸ばして行った。

セリカの特徴は、ユーザー自身の声をボーカロイド化することができたことだ。今まで声優な

ど特定の声のみしかボーカロイド素材はなかった。ホワイト・キャンバスはセリカ内で自分の声データを配布していた。多くのクリエイターがボーカロイド・ホワイト・キャンバスを生み出し、盛り上がっていた。その声からして、高校生から大学生の女の子ではないかと推測されているが実態は知られていない。セリカへのログインが夕方から夜十時くらいの間が多く高校生だと断定するユーザーもいるくらいだ。そんな噂話と相まって、ホワイト・キャンバスはネットアイドルとなっていった。

しかし、二ヶ月前、i マギが登場してセリカはi マギにサービスを移行。それから一ヶ月ほどしてホワイト・キャンバスは交流してこなくなったのだ。チャットやコメントの返信がぱったりと止まってしまっていた。

「長時間の移動で疲れているとは思いますが、早速本題に入りたいと思います」

「お願いします」

薫は軽く頭を下げた。

「今送った資料を見て、何となく気づいていると思いますが、あなたも知るホワイト・キャンバスさんはとある場所に隔離されています」

「はあ……」

「そのとある場所から彼女を救出してもらいたい。引き受けてもらえるかな」

「ホワイト・キャンバスが突然ネット上から姿を消して心配はしていましたが、俺が救出なんてできるのでしょうか。この宇宙でスパイアクションまがいなことを……」

「いやいや、銃で打ち合うようなことは一切ないですから安心して下さい。しかし、これ以上の説明はこの件を引き受けてもらえることになったら、になります。なんせ、人類最先端技術に触れることになるので。あとは花咲さんの意志次第です」

この極秘資料がこれ以上先を見ることができない理由はそういうことか。銃で打ち合うことはないとはいえ、最先端技術が本当に安全なものかはまた別だろう。もしかして、この俺の思考も見られているのか？

薫は目の前で返事を待つ雨宮を見ると、雨宮はコクッと頷いてみせた。

「L ベースの特殊LC Lは花咲さんのATFw (ATファイアウォール) を通り抜けます。花咲さんの思考は監視させてもらっています。悪意の考えをしていないかどうかをね」

雨宮はまじめに答えた。

「悩んでもあまり意味がないみたいですね。でも一つだけ聞いてもいいですか？ それを聞いて判断させて下さい」

「質問はかまわないが、内容によっては答えられない」

「はい」

「何でしょう」

雨宮は机の上で両手を組んで構えた。

「なぜ、俺が選ばれたんですか？」

薫が問うと、雨宮は少し考えて口を開いた。

「それはホワイト・キャンバスさんがネット上に登場した初期から今に至るまで、花咲さんが彼女

と交流が一番深かったからです」

「それなら彼女の家族や友人の方がつながりはあると思いますが……」

「もう手遅れなんですよ。本人の周囲は」

一体ホワイト・キャンバスに何があったんだ。

——知りたい。

そんな思いがふつつつと湧き上がってくる薫。

「彼女の命にも関わることだったので、セリカの運営者にも協力してもらい、彼女のアカウント内を見させていただきました。そしたら、四人ほどプライベートオンリーに登録されていました。ログを確認したところ、初期から健全な交流をしていた方々でした。花咲さんもその一人」

「ネットアイドルとして人気が出た頃くらいに、向こうからプライベートオンリーの申請が来ました」

薫は他の三人について見当もついていた。

「プライベートオンリーでは、全てテキストによる交流だったみたいでしたね」

「はい。セリカ上でも音声会話や顔出しは一切ありませんでした」

ファンの自作自演だというユーザーもいたが、プライベートオンリーでの交流はそんな感じは全くしなかった。他の三人が何を話していたのか知らないが、俺は有り無し問答と題して一問一答のようなことをしてくだらない交流をしていた。それはそれで面白く盛り上がっていた。今思い返せば、表でもできる内容ではあった。わざわざプライベートオンリーでやらなくても多くのユーザーと混じりながらやっても良かった。でも、ホワイト・キャンバスは何も言わず、プライベート・オンリーで俺と交流していた。

「ちなみに、他の三名にはすでにこのサルベージ計画を実行してもらいましたが、全て失敗に終わっています」

「えっ、三人全員失敗？」

薫は目を見開いた。

「はい」

おそらくあの三人が失敗しているのであれば俺も失敗する気がする。でも、ホワイト・キャンバスは命を脅かされている状態にいる。きっと三人は心配するファンの為に即決したはずだ。ホワイト・キャンバスに戻って来てもらいたい。俺もホワイト・キャンバスに心から助けてもらった。それにプライベートオンリーに登録してくれたんだ。もっと多いかと思ってたけど四人のうちの一に……。

今度は俺が……。

「やります。俺がやります」

薫は三度の体表滅菌工程を通過し、病院などで使われている薄い生地の検査着を着せられた。DDD（トリプルD）とプレートに書かれた部屋に通された。その部屋はガラス一枚隔てられ、そのガラスには心電図のような波形や何を示しているのかわからない数々の数値やモニターグラフが表示されている。そして、ガラス向こうにベッド大のカプセルが置いてあった。

白いキャップとマスクをした女性係員がガラス扉を開け、薫をカプセルのある部屋に入るように促した。中に入るとカプセルは四台あり、そのうち一台のみが完全に閉まっていた。他三台は、ワニが口を開けているようにカプセルが開いていた。

カプセルは中の様子が見えるように透明になっていた。ガラス扉の近くあった使用されているカプセルには、まだ大人になりきれしていない幼さをまだ持ち得ていた女の子が横たわっていた。頭や腕に数々のケーブルがつながれていた。

もしかして、この子がホワイト・キャンバスなのか。顔立ちからして噂されていた高校生や大学生ではなく、可愛らしい中学生くらいに見える。セリカでは大人っぽい会話やコメントを残していたから想像できなかった。

ホワイト・キャンバスの隣のカプセルに横になると、係員が手際良くケーブル極をテープで張りつけていく。たかがケーブルでつながただけで、彼女が隔離されている世界に行けるとは思える気がしない。隣で意識なく横たわる彼女は、ただの抜け殻。雨宮はそう言っていた。

係員は薫の作業を終え、カプセル脇にあるスイッチを押した。ワニのように口を開けていたカプセルはゆっくりとしまっていく。係員はガラス扉を出て、向こう側からガラスに映し出された数値などを確認し、操作を行っている。

『花咲さん。気分はいかがですか？』

雨宮の声が薫の頭の中、思考に直接入って聞こえてきた。

「そうですね。少し緊張してます」

『怖がらず安心していて下さい。確認ですが、花咲さんは向こう側で彼女の心に触れ、なんとか心境に変化を与えて下さい。絶零波が弱くなればサルベージできるので』

「わかっています！」

『では、DDDへの接続を開始します。……初期コンタクト完了。第一フェーズに移行。生命データを取得。脳波取得を確認。絶対思考を転送開始』

ここから薫は雨宮の声を聞き取れなくなった。感覚としては眠くなった感じで、頭につけられたコードの中に引っ張られて行きそうだ。一瞬、会議室でのやり取りが頭の中をよぎった。

「やります。俺がやります」

薫は顔を上げ、雨宮に強く言った。

「そう言ってもらえて、こちらとしても助かります。ありがとうございます」

雨宮は微笑み、軽く頭を下げた。そして、続ける。

「現在ホワイト・キャンバスさんが隔離されている所というのが、このLベース内ではあるのですが、DDDと呼ばれるシステムの中です」

薫の思考に先ほど送られてきた資料ページが先に進んだ。図解資料として立方体のマシン絵が描かれて、DDDと名前が添えられていた。そして、

DDD : Described Destiny Device

直訳 : 運命描写装置

人体、ヒト意思を完全にデータ化し、データとして生きることができる。

と、説明が書かれていた。

「システムの中？ このDDDって……」

薫は資料を読んでも理解できないでいる。

「DDDは、我々が開発したiマギの進化版です。簡単に言えばね。iマギは思考を読み取って処理しているだけですが、DDDはヒト自体をデータとして取り込み、DDDの中で生きて行くことができます。肉体を必要としないので、永遠に生きて行くことができます。もちろんデータではありますが、iマギを応用することにより心を持つことができるようになりました。DDDが処理しているに過ぎない訳ですけど」

「じゃ、ホワイト・キャンバスは今データになってDDDの中にいると？」

「はい、その通りです。大変、物わかりが早くて助かります」

「俺もデータになって、DDDの中に行くってことですか？」

「はい」

自分がデータになるなんて信じられない。「0」と「1」の並びに過ぎないものだ。

薫は雨宮と会話をしながら、資料に目を通して行く。DDDの簡単な仕組みが描かれている。

DDDは一メートル四方の鏡を内向きにして向かい合わせた立方体、光鏡機関である。莫大なデータは光信号に変換され、向き合わされた鏡の中へ射出されます。永遠に反射し続けながらデータを維持して行く。鏡の表面は一枚板ではなく光学顕微鏡などで見ないとわからないほど小さな鏡がびっしりと並んでいる。反射する際、その小さな鏡の裏に反射を感知する基盤が組み立てられていて光信号を判別する。またそれは反射角度変える仕組みを持っており、同時に同じ場所へ反射させないようにしている。

現在、DDDはLベースの地下空間にあるが、ガイアックスは将来、大型にして宇宙空間に設置しようと考えている。大鏡プロジェクトと呼ばれている。

「でもデータ同士がどうやって人を救うようなことができるんですか？」

薫は問うた。

「データとは言っても、意思・心はあります。今、私と花咲さんが話すように、そしてこうやって触ることも可能」

雨宮は薫の手に軽く触れた。

「DDDの中に地球と同じ世界を作ろうとしています。データとなった人は、そこで生活します。実世界でいうところのアバター世界みたいなものです。我々はそこをユニバースと呼んでいます」

「ユニバース……」

「はい。一昔前。パソコンや携帯端末でネットにアクセスを行っていた時代にクラウドというシステムが流行していました。現在でも使っている人もいます。クラウド・雲の上と言ってはあれですが、クラウドと比べものにならない程の情報量を宇宙空間で扱おうというところに由来しています。ですが、ユニバース世界は空間としてはありますが、中にはまだ何もありません。現在

そこにデータ化した人物を描写することまでしか開発が進んでいません」

薫はここまで聞いてふと疑問に思った。なぜ、そんなものを作ろうとしているのだろうか。データになってまで生きたいのだろうか。

「花咲さん。なぜ我々がDDDを作っているのか？ もし興味がおありでしたら彼女を救出した後、説明しますよ。説明を聞いた後は、地球には帰すことはできませんが」

薫の思考を聞いていた雨宮が口に出して言った。不気味さをもった笑顔の彼を見て、薫は恐怖を感じた。この部屋に一对一でいるとはいえ、思考は相手にダダ漏れ。安易に探りなどしない方が身のためだろう。

「あまり深入りするのはやめておきます」

薫は苦笑し、この月旅行で初めて背中に冷ややかなものを感じた。

「こちらも事は穏便に進めたいので、ご協力お願いしますよ」

「それで俺はユニバース世界でどうやって彼女を救出すればいいんですか？」

薫は元の話へ戻した。

「救出という言葉がわかりずらくてすみません。DDDにいる彼女をボタン一つで元の肉体に戻すことは可能です」

「えっ。何でDDDの中に……」

「それは彼女の思念・思念波が周囲の人間に影響を与えるからです。しかもiマギを介さずに直接」

「どういう意味ですか、それは」

薫は首をかしげた。

「自らiマギとなった、という表現がわかりやすいでしょう。彼女はLCL通信をiマギではなく対ヒトと行うことができるようになってしまったのです」

「でも、LCL通信はATファイアウォールで拒絶できるはずではないんですか？」

「我々の開発したiマギではそうです。ATFwは外部からの危険なLCL通信をブロックします。人が元から備えている心の壁。誰にも侵される事のない排他的精神領域。嫌なアクセスを自らの意思で拒否できます」

「なぜ、彼女の場合はそれができないんですか？」

「それは、ATFwを浸食し心を侵す絶対零下予言思考をもっているから」

「絶対零下予言思考……」

薫が復唱した。資料の表紙に絶対零下予言思考少女と書いてあったのを思い出した。

「ネガティブ思考で、それが絶対的だと思って下さい。そのネガティブ思考は彼女の思念波に乗って、周囲の人に影響を確実に与えます。その思念波を絶零波と呼んでいますが、それは誰も拒絶することができません。それがiマギを介していたら、かなり多くの人が立ち直れないほど精神的に影響を受け、昏睡状態に陥っていたでしょう。特にホワイト・キャンバスさんのファンの人たちはね」

薫は心臓にくいを打たれたような衝撃を受けた。

「さきほど周囲の家族や友達を手遅れと言ったのは、その絶零波を受けて倒れてしまったってこ

とですか？」

「はい。未だに回復には至っていません」

「なぜ、ホワイト・キャンバスはiマギにはアクセスしなかったんですか？」

薫がそういうと、雨宮はニヤリとした表情を見せた。

「花咲さん。それは私たちにもわかりません。ファンに迷惑をかけないためか。iマギの中に助けを求めても無駄だと思ったのか。ただ、iマギにアクセスする可能性はゼロではありませんでした。アクセスされる前に、iマギの有効圏外である月、しかも月の裏側まで連れてきて彼女を助けようと考えました。もしアクセスされていたら地球はどうなっていたかわかりません」

「それでDDDの中に」

「はい。ユニバース世界で花咲さんには彼女の絶零波を止めてもらいたい。単純にネガティブな考えを改めてもらえれば、肉体に戻っても周囲に影響が出ないのではと考えています」

「それはわかりました。でも、データ化しているならネガティブな部分を削除や書き換えることもできるんじゃないですか？」

データ世界でわざわざ人が説得するような工程を踏まなくていいだろうと薫は思っていた。

「ふふふ。それができたら花咲さんにここまで来てもらうような苦勞はかけていませんよ。医学であれ、プログラムであれ、ヒト、人体とは奥が深く神秘的だ。けれどまだまだわからないことも多い。人を変えるにはまだ人が関わる必要があるんです。永遠に関わり続けなければならないかもしれないですが……」

人を変える——それが俺で本当に平気なのか。たかが高校生でこれといった取り柄もない自分が……。

「それはやってみないとわかりません。誰しも一秒先なんて見えていません。花咲さんの目で確認して下さい」

一閃の光が向かい合った壁に反射してランダムな方向へ流れて行く。その光は消えることはない。

薫の目の前に白い羽を生やした女の子がいた。その羽が蜘蛛の巣にからまっている。暗い世界で不気味に光る緑色の鎖は、彼女の体や手足に巻かれていて、彼女は宙で身動きがとれない状態だった。その鎖はどこから伸びてきているのかわからないくらい遠くへと伸びている。鎖につながれ、黒く長い髪を垂らしたその女の子。

この子がホワイト・キャンバス……。

薫を睨みつけるつり上がった目。カプセルの中で眠っていた幼く可愛らしい印象とは違っていた。何もかもをあきらめ、ユニバース世界の主に捕食されるのを待っているかのようだ。

「プライベートオンリーの四人目か。私を説得しようとしても無駄だ。もう結果はわかりきっている」

ホワイト・キャンバスの声とは違う。ボーカロイドとして人々を魅了していた大人びた声ではなく、脱力してしゃべるのも面倒なくらいの力のない声。

薫の想像と現実の差が開き過ぎていて、薫の頭では解釈できないほどだ。返答はおろか、声を

出すこともできなかった薫。

「私の汚された心に染まりたくなければ、今すぐここから消えろ。最初で最後の忠告だ。前の三人と同じようになるぞ」

「ホワイト・キャンバスさん。一体どうしたんですか？ セリカの皆はあなたを心配して帰ってくるのを待ってます」

薫は差し障りのない言葉を選んで言ったつもりだった。

「なあ、お前もうざいよ。見てわからないのか？」

「！」

奇声を発するようなホワイト・キャンバスに薫は驚いた。

「溜まりに溜まった埃をかぶり、欲をぶちまいた白い海で私は溺れている。このまま海底の闇の中で寝かせてくれ。元の世界に戻るつもりはない。偶像にしか己を吐けない獣がいる世界など滅びてしまえばいい」

「……。ごめん、君の言っていることがわからない」

薫は、どうやって彼女を説得すればいいのか全く考えつかない。自分より年下の女の子が理解し難い言葉を並べ、そこから何か切り口を見つけることなんて俺には無理だ。

「そんなに私のことが知りたいなら、わからせてやる。自分の心も見えぬ獣など先の三人と同じ顛末をたどるがいい」

ホワイト・キャンバスはロボットのように目と口から光を発し、薫はなす術もなく一瞬でその光に飲み込まれた。

――。

――。

――。

薫はいつの間にか目をつむっていた。目を開くとユニバース世界は止まっている。反射をし続けていた一直線の光すら動いていない。

『花咲さん。わかりますか。雨宮です』

薫の頭の中に雨宮の声が伝わってきた。

「あ、はい。わかります。あの、これはどういう状況ですか？」

『見ての通り、ユニバースの時間を停止させています。一分間しか止めていることができません。あのまま、彼女の絶零波を受けてしまうと花咲さんも心を侵されてしまいます。我々にとってあなたが最後の頼みなんです。ここはいったんユニバースから離脱しましょう』

「でも、ホワイト・キャンバスの気持ちがわからないと彼女の心を変える方法が見つかりません」

『花咲さん。こんなこと言いたくありませんが、あなたで救出できなければ、ホワイト・キャンバスの命はここまでだと思って下さい。次の手を考えましょう』

「……」

『花咲さん。そろそろ時間が元に戻ってしまいます』

「かまいません。俺はユニバースに残って絶零波を受けます」

『それでは花咲さんがどうなるかわかりませんよ』

「やってみなきゃわかりませんよ」

『しかし……ダメだ。時間が戻ります』

薫は不安な気持ちに押しつぶされそうだった。でも、たぶん彼女の方がもっと……。

光の波に薫は流されて行く。

目の前を映画のフィルムが滝のように流れて行く。正面から当てられた光が流れて行くフィルム—コマーコマを透かし、白銀の幕にホワイト・キャンバスの心を描き出す。それは薫の目を通して無理矢理水を飲まされているように、心に直接流れ込んで行く。

描き出された世界の色は全て反転して、目が痛い。心は爪でひっかかれたようにじわじわ痛くなっていく。

—紙に描かれたホワイト・キャンバス。男は赤や青、黄、黒など様々な絵の具のチューブを握り、その絵に勢いよく中身を絞り出す。色を変えては何度も何度も中身が出なくなるまで繰り返す。重なり合う色は黒く混じり、きれいに描かれていたホワイト・キャンバスは黒く汚れた—

—男の手で丸められた白い団子となったホワイト・キャンバスを、用意された串に刺す。用意されている串の数は知れない。串団子は火の上で何度もムキを変えられ転がされる。最後に、甘味の飴を塗りたくられて出来上がる。そして、みたらし団子は食べられた—

—山になったパズルのピースの中からまさぐるように目当てのピースを指で一つ一つ確認し、完成したホワイト・キャンバスの絵柄を想像する。位置、形、向きを何度も合うまであてがい、はめ込んでいく。凹凸が上手くつながっていく感覚は小さくも気持ちいいもの。最後のピースがはまった時、最高の達成感を味わうことができる。愛を込めてでき上がったパズル—理想像—は崩し難い。記憶に焼き付けるようにパズルの表面にノリを塗り、額にはめて飾っておこう。出来上がりを何度も見ては最後のピースがはまった時の絶頂感を味わう。そう。額の中で、華やかなステージで黒いマイクを握りしめ、汗を流すほど飛び跳ねて歌うホワイト・キャンバスと一緒に—

お願い。仮の私の姿、ホワイト・キャンバスは自由に汚してもいいから、本当の私を、棲黒白絵（つまぐろしろえ）の中まで入ってこないで。

もう私を汚さないで—

白い蝶の羽を蜘蛛の巣にからませ、体を鎖につながれた白絵の目と口は閉じられ、光は出なくなった。

薫のまぶたは半分閉じ、白絵を見つめていた。白絵の絶零波を受けてもまだ自分がある。でも頭の中は、渦巻く白絵の悲しみと喪失感でいっぱい、ぐちゃぐちゃしている。

「あなたも私を捕食した一人に過ぎないのよ」

白絵はくたりと肩を落とす。

「ち……ちがう」

「しづといね。早く逃げたがいいよ。私と二人でいたら、今以上に自分を無くすことになるよ」
白絵は意味深な笑みを浮かべた。

—私と二人でいたら……。

そうか。今は二人きりなんだ。あの時と状況は一緒だ。あれを……。渦巻く海の中で薫は一つ

の光を見つけた。

「ホワイト・キャンバス一色に染められるのなら、自分がなくなってもかまわない」

薫がそう言うと、白絵は薫を睨みつけ、

「気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い」

「ホワイト・キャンバスの本当の姿、白絵さんに会えた記念に『有り無し問答』をしよう。プライベートオンリーでやってたでしょ」

「……」

白絵の表情は固まり、白絵の頭の中はネットを楽しんでいる自分の姿が駆け回っている。自分の声で作られた歌。千差万別のホワイト・キャンバスのキャラクター。白絵はそれを見て楽しんでいる。

「白絵さん。君は何も知らなかったんだよね。だから、ビックリしちゃったんだ。ネットからイメージが変わったことで、今まで見れなかったものが流れ込んできちゃったんだ。けがらわしく欲望に満ちた思念が。それをホワイト・キャンバスに向けた愛だと勘違いして拒絶しなかった。もう少し大人になって違う形で欲望に満ちた行為を知っていたら、拒絶できたかもしれない。別の受け取り方もできたはず。でも、大丈夫。白絵さんは、汚れてなんかいない」

「――私はよごれて……ないの？」

「そうだよ」

白絵の肩の力は抜け、カプセルで眠る幼い表情を取り戻しつつあった。

「それじゃ、始めようか。お題は無人島に持っていく物で有り無し」

「無人島……」

白絵の片手に巻きついていた鎖が前ぶれもなくほどかれる。巻きついていた細い手首の肌は赤く鎖の痕が残っていた。

「友達」

薫が問うた。

「……なし。いない」

白絵の考えに薫は頷く。

「親」

また薫は問う。

「……有り……かな。なしかも」

白絵の答えに薫はまた頷くだけだった。

「時間」

また薫は問うた。

「あり。永遠なんていない。長過ぎよ」

白絵の口調はしっかりとしたものになってきた。

「そうだね。俺もそう思う」

薫は笑みを浮かべた。するとまた、何の前ぶれもなく、白絵の体に巻かれていた鎖が解かれる。白絵の苦しそうだった表情がやわらかくなる。

「妹を思う兄」

続けて薫が問う。

「なし」

「ホールデン＝コールフィールドの声」

さらに薫は問う。

「あり。退屈しなさそうね」

白絵の両足を拘束していた鎖がほどけ、足が自由になった。

「紙とペン」

と、薫。

「あり。その日にあったことを残すの。自由な思いを描きつづるのもいいね。それがホワイト・キャンバスの由来よ。本当はセリカでも自由にやっていたかったの」

「そうだったんだ。静かに続けられていたら良かったね」

「今さらって感じ」

「じゃあ、i マギ」

薫が問うた。

「なし。リアルだけどリアルじゃない。邪魔ね」

白絵が答えた。背中に生えた蝶の羽にからんでいた蜘蛛の巣がシャボン玉が割れるように消えた。

白絵は羽ばたいた。広いのか狭いのかわからないユニバース世界を飛び回り、薫の前で止まった。

「データになってまで生きてくもない。こんな世界が嘘っぱちだってこともわかってる！」

「白絵さん……」

白絵は、また目と口を開いた。両手も広げると白絵の全身から光が溢れ出す。薫は何もできず、瞬く間に光の波に飲み込まれた。

DDDのコントロールルームの計器は全てエラーを表示し、エラーランプが部屋を赤く染めていた。雨宮は愕然とし、イスの上でうなだれていた。

薫は目を覚ますとカプセルはすでに開いていた。手や体、頭に張りつけられたケーブルの類いははずし、カプセルから出た。白絵のカプセルも同じく開いている状態だった。薫は白絵を見ると、まだ彼女は目をつむったまま。このまま目覚めないのだろうか心配になる。

覚えている限り、ユニバースでの最後、白絵は俺に絶零波をくらわせた時と同じ行動をとった。なぜ、そうしたのか。光を放つ白絵が脳裏に浮かんだ。

しかし、こうして俺はユニバースから肉体に戻ってきている。絶零波の影響は出ていないと自覚している。精密に調べたらわからないが。あの光を受ける前に雨宮さんが俺をユニバースから強制離脱させたのかもしれない。でも白絵は……。戻ってこないということは、彼女の絶零波を押さえることはできなかったということなのか。このまま彼女は何もわからないまま死を迎えるのか……。

――。

――。

――ごめん。ホワイト・キャンバス。

「白絵さん。本当にごめん。もっと話をしたかったのに。今までのプライベートオンリーよりも楽しかったよ。ごめん……」

「何で謝るんですか？」

白絵の声に驚いた薫は白絵を見ると、彼女は目を開き、起き上がろうとしていた。

「白絵さん。良かった。最後、ダメかもと思ってしまいました」

薫は体の緊張が解け、白絵のカプセルにもたれかかった。

「あの世界を壊そうと全力で叫んでみたけど、無理だったみたい。あなたが離脱したあと、私も強制離脱させられた。でもすっきりしわ。何もかも吐き出したって感じ」

白絵は笑って背伸びをしてみせた。そして、自分を確認するように自分の体を触り始めた。

「自分の体にいる方がやっぱりいいわね。あの何もない中にいると、何にも触れず静かでただそこに存在し続けるって感じだったけど、これからしばらくは自分の目で見て、耳で聞いて触れるモノがある世界にとどまるわ」

「もう、ホワイト・キャンバスとして活動はしない？」

薫は聞いた。

「しっかり現実を掴むことができたらかな」

と、白絵は薫の手を握った。薫はゆっくり握り返した。そして、白絵が、

「人の手って、温かいのね」

と、言った。

すでに消灯時間は過ぎている。

病室のカーテンはベッドの所だけ開いていて、月灯りが差し込んでいる。降り続いていた雨は昼のうちにやみ、雲は晴れた。

薫と牡丹は晴れた星空に浮かぶ月を眺めていた。その月は、満月を過ぎて欠け始めている。牡丹は昼間の勤務を終え、私服姿であった。

「壮大な話ね」

一度聞いただけでは理解できなかった私は説明を受けながら薫の話聞いていた。たびたび壮大だと思っていたが、感想はその一言に尽きた。

「未来は誰にでもあると言います。今という現在もあるのに。自分以外の何かにとらわれながら、皆、明日は満月になろうとしている。もし、満月になったら、円満を保っていられると思ってますよね」

「……」

「満月の未来は欠ける他ないんです。俺という月と同じで。根本的に俺に満月の時はなく、初めから欠けている状態だったのに……。この子たちは俺にとらわれてしまった。どうしようもないのに」

薫は、標本ケースを大事に持っていた。すでに白絵も標本の中に加えられている。

「白絵さんは自分の体に戻れて良かったみたいだし、こうして薫君の手の中におさまった。ということは、白絵さんや他の子たちにとって、どんな状態の薫君であっても薫君が抛り所なんだと思うよ」

「この子たちの抛り所が俺……」

薫は首をかしげて、

「そうなのかな。仮にそうだとすると、俺の抛り所はどこにあるんですかね、牡丹さん。ここが抛り所で入院しているのかな。いや、ここはとらわれているって感じだし」

薫は薄暗い室内を見回した。

「ここを薫君の抛り所にしたらダメよ。今はいいけど、まずはお家に帰れるようにしないと」

「そ、そうですね」

薫は手に持った標本ケースに目を落とした。

「さあ、そろそろ寝ましょう。これ以上は体に障るわ」

薫は標本ケースをベッド脇の台の上に置き、布団の中に入った。

「彼女たちをつかまえて来たのは薫君だし、薫君が彼女たちを求めていたのかもしれないよ」

「そうなのかな。わかりません」

薫は半身布団から出て標本ケースの中にいる子たちを見つめた。

「この子たちと相談してみます。近いうちに」

そう言って薫は布団に入り直した。牡丹は布団をしっかりと薫にかけた。

「そう。わかった。おやすみなさい、薫君」

「おやすみなさい」

牡丹は満ち欠けた月を見ながら静かにカーテンを閉めた。

——満月は次の日から欠けてしまうけど、十四日目の月には明日がある。明日という希望が……。

「おはよう！」

朝、そう言ってスライド式のドアを開けて薫の病室に入って来た牡丹。薫はベッドの上に立って何やら、はしゃいでいるようだった。幼い子供がまるで飛行機を手にもって飛ばしているように薫は遊んでいた。

「薫君。ご機嫌のようね。朝ごはんだよ」

牡丹が声をかけると、薫はベッドから飛び降りた。室内を走り回る。朝食の乗ったトレーを持った牡丹の周りをぐるぐると回る。

「ちょっと、ぶつかったら危ないでしょ」

牡丹はそう言いつつも薫が手にして飛ばしている鮮やかな色をしている羽を見ていた。四枚の羽の中心は黒く外へ広がるに連れて色が変化している。下の両羽は黒から青へ。そして、縁は白。上の両羽は同じく黒から薄黄色へ。縁は同じく白。縁より内側にオレンジ色の斑点がどの羽にも二つずつあった。

「俺もこうなりたい」

薫は自分で操る蝶の女の子を見ながら言った。声も表情もとても明るい薫。

「薫君も空を飛びたいの？」

嬉しそうな薫君を見ていると私も何だか心が楽だわ。でも、このプラスの反動が突然機嫌を損ねてつぶれて欲しくないのが正直なところ。そうってしまった時の対応が大変なのは目に見えている。

「水を得た魚です」

「どういうこと、薫君」

牡丹は朝食をテーブルに置いた。そして、カーテンを開けると眩しいほどの朝の陽が室内に差し込んでくる。

「そういう場所や環境、人と出会うことが必要ってことです」

「薫君は見つけられたってこと？」

「この子は見つけられたようです。俺は俺でそんな場所を見つけないんですけど……」

薫はそう言いながら、ベッドに座った。両手で優しく包み込む蝶の羽を生やした女の子を見て、一つため息をするとガクッと肩を下げた。

「好きでやった訳じゃない。偶然、そうってしまった。今までそうしないように気をつけて来たのに、一度のことで全てがひっくり返ってしまうんです。俺の生きる世界は……。この子もそうなんです」

さっきまではしゃいでいた薫ではなくなっていた。牡丹はたんたんと話す薫の手元を見た。鮮やかな羽を生やした幼い女の子は着物を着ていた。羽の鮮やかさとは真逆で色味のない地味な着物だった。

「気にかけて気にかけて細かく対応しているはずなのに、それは望まれず、たった一枚羽をむしり取られてしまうだけで飛べなくなってしまうんです。認めてもらえない。飛べないやつとして

。どうしてですか？ 何で平等って言葉があるんですかね」

思っていたよりも早く薫君の気持ちは反転してしまったか。もしかして、これが絶零波というやつかと牡丹は昨日薫から聞いた話を思い出した。白絵さんほど強力なものでないにしろ薫君がこうなると私の気持ちも少しへこむ。薫君の気持ちをいじってしまったのかと内心焦ってしまう。

「私と言えることは、物事に基準があって、枠組の中で行動を展開しなければならないの。それを守って平等として扱われる」

牡丹は言った――薫君はどうとらえるのか。自分はその基準、枠組からはずれているのかと考えるのだろうか。

「結局、俺はこの子を箱の中に入れなきゃならない。それしか方法がない。もっと自分に、狂わない強い心があれば、彼女たちを捕らえることもなかった……。生み出さなかった……」

そう聞いて牡丹は少しほっとした。薫が変に思い悩んでしまうかもしれないと思っていた。

――なんだ。結局、自分のことじゃなく、この子たちのことばかり見ているのね。

「薫君。そんなこと言わないで。この子たちは薫君を求めて来たんだと思う。薫君も望んでいたから、今一緒に薫君の手の中にいるんだよ。世の中の基準や枠がなんなのよ。薫君が自ら作り出した世界、その世界が良くて薫君の所へやって来たのよ、彼女たちは」

――私じゃない。

「俺が作り出した世界……」

「そう。薫君の世界が必要なのよ。創っていきなさい！」

薫は標本ケースの中に、今日新たに捕らえた子を入れた。ガラス板を元にはめ直すと、薫は一人一人目を合わせ、会話するように頷いていた。

「さあ、朝ごはんを食べよう。薫君」

そう。私は彼を見守ることしかできないのね。

「よう、待ってたぜ。あんたたちのためにイイ案件を取っておいたぜ。セリパラの船長！」

どんな街にもある案内所の紹介屋は、扉を開けて入ってきた薫率いる三人組に向かって言った

。

「俺らを呼びつけたんだ。それなりの依頼なんだろうな」

薫はカウンター越しに言い返した。

「いっちょまえに言うようになったな。十七才の後継ぎ空賊のひよっ子が」

ヒゲ面の紹介屋もカウンターに乗り出し、薫の額に自分の額をこすりつける。薫も負けじと押し返す。

「船長。周りの人に迷惑がかかるので、やめて下さい」

眼鏡をかけた好青年のイノガリが薫の襟首をつかんで紹介屋から引き離れた。案内所ではテーブルで説明を受けている空賊類いの輩や、依頼を申し込む人、壁に張り出されている依頼内容を読んでいる人もいる。

「おい、イノガリ、放せ。副船長のお前が船長のやることを押さえ込むとは、どういうつもりだ。お前が俺の後に続かないでどうする」

「続かないも何も、私の額をどこにこすりつけろというんですか！ 我々は、依頼を受けに来たんです。額で小競り合いをしに来た訳ではありません」

薫より年が十才上のイノガリは、声を荒立てることなく言い終えた。薫は口をすぼめ、何も言わなかった。

「立派になったじゃねえか、お前も。先代の船に乗っていただけはあるぜ」

紹介屋はあごヒゲを触って笑った。

「もうね、船長と言っても、見習い並みの子供だから」

薫の一つ年上の女空賊ハレミは、母親が自分の子供を謙遜して紹介するように答えた。

「うるせー。で、うちの依頼は？」

薫はふてくされた顔になった。

「おう。それなんだがな。今朝、下（地上）から上がって来たばかりでな。新鮮だぜ」

紹介屋は、カウンターの中から一枚の紙を出して、薫たち三人に見せた。

「魚屋じゃねえぞ、ここは」

薫が突っ込んだ。

「生きがいいぞ。詳しいことは読んでもらえばわかるが、簡単な話、誰もいない海のど真ん中にとあるモノを捨ててくれってよ」

「とあるモノ？」

薫は依頼書を受け取り、見ることもせずイノガリに渡した。

「あれだよ」

紹介屋は案内所の隅に置いてある一メートル四方の木箱を指差した。所々、空気穴のような小さな穴が空いている。薫はそこから中を覗いても中は暗く何が入っているのかわからない。

「中身は何なのよ？」

ハレミは依頼書をじっくり読んでいるイノガリに聞いた。

「書いていませんね。マスター、中身のことは依頼者から何か聞いていませんか？」

「中身については、何も言ってなかったな」

「んじゃ、開けてみるか」

薫は上蓋に手をかけた。

「船長、開けてはなりません！」

イノガリが強く口早に言った。薫の動きがピタリと止まった。冷静なイノガリがそう言う時は、何かまずい時だと薫もすぐにわかった。

「何でだ？」

薫が問う。

「依頼書に中身の確認はできるだけしないで欲しいと書いてあります。もし、確認したければ、依頼を正式に受理し、街を離れた船の中で行ってくれと」

イノガリが依頼書を確認しながら言った。

「引き受けておけよ。この報酬は五千万だ。しかも先払いだぞ」

紹介屋は、嬉しそうにケースをカウンターの上に置いた。ハレミが目を輝かせながらゆっくりとケースを開けた。びっちりとした札束が詰まっている。

「くおー。はぶりがいいね。あの箱を海に捨てるだけでこんなにももらえるなんてね。おい、船長この依頼、引き受ける！」

ハレミは今にもよだれをこぼしそうな表情だった。薫はジロッとハレミを睨んだが、すぐに木箱に視線を戻した。そして、両手で箱を持ち上げた。

「少し重いな。二人がかりだな」

よくこんなものを下から雲の上まで運んで来たな。富士越（ふじえつ）の街は、下から富士の山でつながっているとはいえ、なぜここまでわざわざ上げてくる……。船を地上まで呼びつけばいいのに。それにあの多額な報酬金……。

「順序が逆だろ。先払ってよ、どうせ危ないものか何かだろうな」

薫はそう言いながら、イノガリの持っていた依頼書に了承サインをした。そして、依頼書を紹介屋に渡す代わりに、報酬金が入ったケースを手にした。

紹介屋は、薫のサインを確認し、

「確かに。この依頼はセリカ・パラノイド空賊団に託したぜ」

と、きざったらしく言った。

富士越の街は、数ある雲の上の街でも大きな街で、港には大小様々な船が泊まっている。造船ドックもあり賑わっている。

港まで続くメインロードをイノガリは例の木箱を案内所で借りた台車に乗せて押していた。その前をハレミは気分がよさそうに大腕を振って行進している。

「で、なぜついてくる？」

最後尾を歩く薫は、隣に並ぶ紹介屋に言った。

「そりゃー、船が出る前に中身を確認されるとまずいから監視だ。ついでに見送り」

紹介屋の最後の一言は小声だ。

「見ねえよ。仕事だからな。ん？」

薫は港に並ぶ船の一艇に目がいった。

「なんだ、この黒い船。重そうだな。ちゃんと飛ぶのか？」

「ほお。俺も初めて見たよ」

紹介屋もその船を見た。黒い鉄で造られ、一般的な木造の飛空艇とは雰囲気が違う。クジラのような飛空艇がどっしりと停泊していた。物珍しいのか辺りには見物客が多くいた。

「黒鉄の飛空艇ですよ。どこかの金持ちが造らせたとかで、先の大戦中、砲弾が飛び交う間を無傷で通ったという噂話があります」

イノガリが台車を押しながら説明をした。

「弾が効かないなら、事実上無敵の不沈船か。硬く無愛想極まりない冷たい船だな。全く暖かみを感じられねえ。やっぱり木造船だな。セリパラ号ほど乗り心地のいい飛空艇はねえ」

結局、船長は自分の船を褒めたかただけかとイノガリは内心思っていた。だが、なぜ雲の上に地上人の黒鉄船が泊まっているのか。確か先の大戦では、戦争とは関係ない国家任務を遂行する際に飛んだらしいが……。私たちの知らないところで時代が動こうとでもしているのか。空まで巻き込んで欲しくないな。

セリカ・パラノイド空賊団幹部三人と紹介屋は、セリカ・パラノイド空賊船—セリパラ号に到着した。

「おらー、野郎ども。とっとと荷を運び入れるんだよ。船長が戻って来たのに出向準備ができてないってどういうこと？」

ハレミは、もたもたしているクルーたちに叫んだ。近くで荷を運ぶ若手クルーのお尻に蹴りを入れるハレミ。

イノガリは荷入れをしているクルーに依頼の木箱の中に入れるように指示した。

「クルーは皆、若いな。人は少なそうだが」

紹介屋はセリパラ号を見回して言った。

「多いと船が沈む」

と、薫が答えると、紹介屋は腹を抱えながら大笑いした。

「何がおかしいんだ？ 沈めるぞ」

握りこぶしを見せる薫。

「ああ、悪い悪い。薫の船だった。気にするな。うー腹いてえぜ」

紹介屋は笑い続けた。

「船長。そろそろ出向できるよー」

ハレミが甲板から声をかけて来た。薫は手をあげてわかったと合図を送った。

「もうこの金は返さないから。気が向いたらまた寄るわ」

紹介屋に捨て台詞を吐き、甲板に渡された細い橋を薫は渡った。振り返ると紹介屋はこちらに

手を振っていた。隣でハレミも手を振っていた。

薫は船の少し高い所へ移動し、出向準備をするクルーを見下げた。

「今日の夜は祭りだ。心して仕事にかかれ！」

船長の張り上げた声に呼応するように、クルーの雄叫びが上がる。

「遠深黒海に向けて、出航！」

「セリカの願い星に届け！ キャプテン！」

クルーは声を揃えて言い放った。いつの間にか薫のそばに立っていたイノガリと薫は目を合わせると、イノガリがコクッと頷いた。踵を返して操舵室に向かって。クルーたちは、遠深黒海と聞いてざわついていた。中には怯えるやつもいれば、祭りになるくらいの仕事は何だと騒いでいるのもいる。海の船乗りでさえ恐れる海域。海流、天候と何も先読みができず、いくつもの船が沈んでいるという。

セリパラ号はゆっくり港を離れ、船首を回転させ、ただただ空の広がる雲の大海原を飛んでいく。

セリパラ号が行く航路の天候は穏やかで順調に航行している。

整頓されて物が積まれている貨物室に依頼された例の木箱は置かれていた。イノガリが木箱のフタを開けようと、打ち込まれた釘を釘抜きで抜いている。薫とハレミ二人がその様子を見ていた。

「開けて、ドカーンとかやめてよね」

ハレミは大げさに両手を広げた。

「だったら、ここにいるな。船尾にでも行ってろ」

イスに座ってその様子を見ている薫は、腕と足を組み貧乏揺すりをしている。

「嫌だ。イノガリ、早く開けてよ」

「だったら、ハレミも見えないで手伝ってくれてもいいんですよっと」

最後の釘が抜け、イノガリはフタの左右に両手をかけた。

ハレミは息を飲む。

薫の貧乏揺すりが止まる。

イノガリがフタを開けた。

「エッ？」

一瞬、間が空いてイノガリが目を見開いた。

「これは……」

すぐに薫とハレミがやって来て、木箱の中を見ると、二人の動きが一瞬止まった。箱の中にはこちらを見上げる幼い女の子がいた。その子は怯えて震えている。田舎染みだ着物を着ていて、長い間着古されくたびれた着物だった。そして、女の子の背中側には黒い布がかぶさっていて何が隠してあるようだ。

三人は驚きを隠せず、目を合わせた。

「中身を見るなって、こういうことか……」

薫は腕を組み、けわしい顔をした。

「船長。これは見ない方が良かったですね」

「そうだな……。フタをしろ」

薫の命令にイノガリは困った表情を浮かべた。

「あんたたち、生かしたまま海に捨てる気？ まだこんな幼い子供」

ハレミが両腕を伸ばし、フタをさせないよう木箱を覆った。箱の中の子は、ひざに顔をうずめて泣きだした。

「どうして捨てられたのかは知らないが、空賊への依頼に同情などいらない。先の大戦で一つの同情が迷いを生み、この船の船長は死んだ。セリカ・パラノイド空賊団のクルーもな」

薫は強く拳を握りしめていた。

「対象が子供であろうと無駄な同情はするな。これは船長命一」

「まだ引きずってるの、薫ちゃん！」

薫の言葉尻にかぶせてハレミが言った。

「ハレミ。船の上で子供扱いするように呼ぶなって言っただろ」

「もっと大人になろうよ、薫ちゃん」

「十分大人だ。それにこの船の船長だからな」

「違うよ……。薫ちゃんのお父さんだったら見捨てたりしない。もっと器が大きかった。だから、こんなに立派な飛空艇を飛ばして、今よりも多くのクルーに囲まれていた」

ハレミの言葉を聞いて薫はハレミに背を向けた。

「思い出させるな。……。わかってるよ」

薫の声は震えていた。イノガリは一步離れて二人のやり取りを見ていた。やれやれ、まだまだ子供ですね船長と思っていた。

「どちらが船長なのか私にはわからなくなってきました。で、ハレミはこの子をどうしたいのですか？」

イノガリが聞いた。

「決まってるじゃない。私の妹にするのよ」

大まじめな顔でハレミは言い切った。

「即刻、船を降りろ。その子を連れて。兄弟ごっこは地上でやってろ」

イノガリに何かを言われる前に薫が口早に言って詰め寄った。

「嫌よ。すぐ下は海だし。だいたい報酬金先払いで手に入ったんだから、この子をどうするも私たちの勝手でしょ」

「うっ。それはそうだが……」

薫は何も言い返せなかった。

「依頼完了の報告も必要ありませんから、事実」

さらにイノガリがハレミの発言に付け加えると、薫はますます何も言えなくなってしまった。

「泣かないで、大丈夫だよ」

と、ハレミは女の子を箱の中から抱き上げ、近くの荷の上に座らせた。背中にかぶされた黒い

布は女の子の背丈ほどあった。

薫は、自分の意見を通すことをあきらめ、イスに座り直した。

「名前はなんて言うの？ 年はいくつ？」

ハレミは、すすり泣く女の子の膝をやさしくさすりながら聞いた。すぐに答えなかったが、少し待っていると女の子は泣きやみ、うるんだ赤い目でハレミを見つめた。

「あおい。楯葉蒼（たてはあおい）」

「蒼ちゃんね。年はいくつかな？」

ハレミが再度聞く。

「十才」

すぐに答えは返ってきた

「十才か。狭い箱でよく頑張ったね。背中の黒い布は何かな。見てもいいかな？」

蒼は首を左右に振って、ハレミの服をつかんだ。

「いや。ダメ。あたし呪われてるの。見たらお姉ちゃんも死んじゃう……」

蒼がつかむ手の力がさらに強くなる。

「んー、見せてくれないと、あそこにいる怖いお兄さん二人がもっと怖くなるよ」

ハレミは冗談めかして言うと、蒼は薫とイノガリを交互に見て震えた。

「ハレミ。なぜ、私も入るのだ」

イノガリは心外だと感じた。薫は何も言わず、ただふてくされながら蒼を見ている。

「こわい」

「でしょ。だから、少し見せてくれたら、また布をかけてあげる」

「……わかった」

「はい、いい子ね！」

ハレミは普段薫たちに見せない優しい笑顔をしていた。蒼の背にある黒い布をはぐと、蝶の羽が蒼の背中から生えていた。鮮やかな黒と青と白の色。オレンジ色の斑点が目につく。

「これは……蝶人間か……」

思わずイノガリは声を上げた。

「蝶人（てふと）だ。……田舎病だか呪いにかけていると先代に聞いた事がある」

薫が答えた。

「きれいな羽。蒼ちゃんは妖精さん？」

蒼はハレミの言葉を聞いて驚いた表情を見せた。

「きれい？ 羽が？」

「ええ。とってもきれい」

「あ、触っちゃダメ。粉がついて死んじゃうから」

ハレミは蒼の羽に触れようとして、蒼に止められた。

「死んじゃう？ どうして？」

「羽からこぼれる黄色い粉を吸うと、死んじゃうの」

「おそらく羽についている鱗粉だろう。何らかの作用で鱗粉が毒化してしまったのだろう」

イノガリが言った。

「親に捨てられたのか？」

薫は表情を変えず、まっすぐ蒼を見て聞いた。

「ちょっと薫ちゃん。そういうことはまだ……」

「お母さんはこの粉を吸って死んじゃいました」

蒼の一言で、その場は静まり返った。飛空艇の機関音や風を切る音、風のぶつかる音も聞こえない。

「お父さんは私が生まれて、私に羽があると知っていなくなっていました。お母さんがそう言ってました。羽は最初小さくて、私が大きくなるとだんだん大きくなって隠しきれなくなりました。そして、山奥の村の蔵の中に逃げました。でも村の人たちにだんだん気味悪がれて呪いとか言われて、お母さんはお医者さんを探してくれたりしました。でも何もわかりませんでした。そして、昨日、私は捨てられることになり村の人に蔵から引っぱり出されて、その時お母さんが私を守ろうとして……。私が抵抗したりしたから羽から粉が落ちて、お母さんがそれを吸ってしまった」

蒼が話し終えても、誰も次につなげる言葉が出てこなかった。

突然、貨物室の扉が開き、クルー十人ほどが雪崩れるように倒れ込んできた。

「誰だよ、押したの」

「押すなって言っただろ」

「……かっ、かわいい」

クルーは口々に言う。蒼は驚いていたが、男子にかわいいと言われて少し照れていた。

「イノガリ」

薫は一言。

「君たち。自分の持ち場はどうしたんですか？ 船内で覗きとは趣味が悪いですよ」

わざと足音を立てて、慌てて起き上がるクルーに近づいていく。クルーたちは蜘蛛の子を散らすように貨物室から出て行った。イノガリも貨物室の扉を閉めて出て行った。

「どいつもこいつも歓迎ムードか」

と、薫はため息をついた。

突然、衝撃、爆音とともに貨物室が爆煙に包まれた。

「次から次へと何だってんだ。ハレミ、無事か？」

煙で何も見えない。薫は煙を吸わないようにして言った。

「こっちは大丈夫。蒼ちゃんもそばにいる」

煙の向こうからハレミの声が聞こえた。すると貨物室に充満していた煙が流れるようにして、船の外へと出て行く。煙がすっかりなくなると、辺りには砕け散った木片が散乱していた。そして、船の外壁にはぽっかりと穴が空いていた。外が丸見えになり、風が出たり入ったりを繰り返している。

『左舷中央被弾。被害状況を確認しろ』

船内アナウンスが入った。

「船長は直撃されたっての」

薫は苦笑いをしながら、空いた穴から外を見渡した。遠くに飛空艇が見えた。

『左舷後方七時に敵船を確認』

この距離で砲撃をくらわせるとはな。

セリパラ号の進む先に黒い雲が広がっている。遠深黒海だ。風は吹き乱れ、稲妻があちこちで光っている。黒い雲の下の海も黒く、見分けがつかない。

「イヤー」

「蒼ちゃん。どうしたの？ ビックリしちゃったよね。私がそばにいるから大丈夫よ」

震え上がる蒼をハレミは抱きしめた。

「私を殺しにきたんだ」

「そんなことない。大丈夫よ、蒼ちゃん」

「それはどうかな、ハレミ」

薫が会話に割り込んだ。

「どういうこと？」

「俺らはつけられていたんだよ。この子を海に落としたかどうかを確認するために」

やっぱりな。薫はもう一度敵船を見るとその姿が大きく見えていた。それは、富士越の港に停泊していた黒鉄の飛空艇だった。

「そんな……」

ハレミは蒼の頭を優しくなでた。

「昨日の今日で、地上から富士越まで登って来たということは飛空艇を使わない限り早く来られない。五千万の大金はすぐに依頼を引き受けさせたいためだったんだろう」

「えっ、じゃあ初めから……」

「船ごと沈める気だったってことさ。今ここでこの子を海に放り出したところで結果は変わらないだろう。それになんか、うじゃうじゃ出てきやがった」

黒鉄の飛空艇の前面が口を開き、中から小型戦闘機が飛び出してきた。あの黒鉄は母艦ってことか。絶対防御の不沈船。面白いじゃないか。薫の心は高鳴った。

そこに若いクルーが一人息を上げながらやってきた。

「船長！ 無事でしたか。敵船がやってきます」

「わかってる」

薫は貨物室にある集音器に向かって、

「ロウジン。機関は無事か？」

『セリパラ号は飛んでいるぞ。問題はない』

しわがれた男の声が返ってきた。

「このまま遠深黒海に突っ込んでも大丈夫か？」

『入ったら抜け出せんかもな。もう機関も若くない。それに外壁やられとるんだ。そこからバラバラになるぞい』

「そうか。小さい虫を払い落とそうと思ったんだけどな」

『黒海ギリギリまでなら平気だと思うが、虫は自分たちで払い落とせや』

「そうする。機関よろしく、ロウジン」

『セリカの願い星に届け！ キャプテン！』

「よし、戦闘だ。迎え撃て！」

集音器に向かって強く言うと、薫の声が船内に響き渡った。すぐに、クルーたちの威勢のいい声が船内のあちこちから聞こえてきた。

まもなくして、早くも小型戦闘機の砲撃をセリパラ号は受けてしまう。

「穴だらけになりそうだな、これは」

「早くしないとこの船、本当に沈んじゃうよ、船長！」

ハレミは震える蒼を抱きしめながら言った。

「その子をどうするかは戦闘の後で決める。ハレミは、その子と船の中央に移動しろ」

「わかった」

「地上のゴタゴタは地上で始末しろってんだ。空まで巻き上げてくれるなよ」

薫は楽しそうに笑みを浮かべて、貨物室を出て行った。

「さあ、私たちも行きましょう」

ハレミは蒼をそのまま抱きかかえて貨物室から出て行く。揺れる蒼の羽から青色の粉がこぼれ落ちていった。

デッキは風が吹き荒れ、何かにつかまっていなくてバランスを崩し体ごと飛ばされそうになる。セリパラ号は船体をギシギシ言わせながら、遠深黒海の淵を飛んでいた。黒い雲との境目を航行し、時々内側へ引き込まれそうになる。

「戦況はどうだ」

薫がデッキに出てきて、イノガリに聞いた。

「見ての通り、風の影響で戦闘機はここまで近づけないでいる。だが、風に乗ってくると打ち込まれる」

「風に慣れるのも時間の問題か。向こうの戦力は？」

「小型戦闘機が四機飛び回っているが、母艦の力は不明。その小型戦闘機なんだが」

イノガリが説明しようとした時、一機の戦闘機がセリパラ号の真下から突風に乗って、急浮上してきて船の真上で止まった。すかさず、クルーはデッキから発砲する。が、すべての銃弾は黒い装甲に弾かれてしまった。

「めり込むこともなく傷一つつかないのか」

薫は驚いた。

「母艦の黒鉄と同じ装甲のようで、弾は弾かれるだけ」

イノガリは言い途中だった説明を続けた。

真上の戦闘機は、機体を風に揺さぶられてバランスを保てず遠深黒海側へ引きずり込まれてしまった。

次にセリパラ号の後方に位置取った戦闘機が銃撃してきた。数発、銃弾が当たった。

「セリパラ号を蜂の巣にする気かよ」

薫は攻撃されてカッとなり、デッキから身を乗り出して肩から下げていた銃を後方の戦闘機にむけて撃った。連射された弾は、先と同じように装甲に弾かれるだけだった。

「船長。無理しないで下さい。落ちますよ」

イノガリは半身船の外の薫をつかみ押さえていた。

「軍隊ですら装備していない特殊装甲。うちの飛空艇も黒鉄でまとった方がいいのか。俺は木造の何とも言えないやわらかい飛空艇が好きなんだよな」

薫は肩を落とした。

「私も木造のセリパラ号が好きです。船長、一緒ですよ」

「イノガリ……」

「提案ですが、あれを使いますか？ こんな時だからこそ」

「ミドリムシか。わざわざ親父が残していったやつな」

二人は目を合わせて笑う。

「準備してくれ」

薫は親指を立てた。

「浮力推進機関の出力が一時的に減少しますが」

「敵艦が沈めば問題ない」

「了解。船長！」

イノガリは船内に走っていった。

「セリカ・パラノイド空賊団の秘密兵器が登場するまで保たせろよ」

薫はそう言って、クルーと一緒に銃を構え、戦闘に加わった。

「ちょっと狭いけど、我慢してね」

ハレミは、蒼を自分の部屋に連れてきた。二段の寝台があるだけの部屋だ。

「ごめんなさい。皆さんを巻き込んでしまって……」

「始まっちゃったんだから、もうそれは言わないの。大丈夫よ。こんなこといつものことだから」

「えっ！ いつも戦っているんですか？」

「毎日って訳じゃないけど。皆、はみ出し者ばかりだし、何かと目をつけられているの。トラブルには慣れてるしね」

誇張して言ったつもりのハレミだったが、それでも蒼は申し訳なさそうにももの憂い表情である。

「でも船長さんは、俺らを巻き込むなって言ってました」

ああ、とハレミは言って、貨物室を出る際に薫が言ったことを思い出した。

「あれね。こういう状況をほとんど楽しんでるからわざと言ったの。でも、苦戦してるみたいだけど」

と、ハレミは狭い天井を見上げた。飛空艇の賑やかな音が耳に入ってくる。風がぶつかる音や

船がきしむ音、機関音、発射される銃弾の音。

「もし、この戦いに勝ったら、私、どうなってしまいますか。やっぱり海に捨てられますか？」

「させない。そんなこと私がさせない。もし船長がそうするなら、私が船長をこの船から突き落としてやるわ」

「どうしてそこまで……」

蒼にはここまで優しくしてくれるのかわからなかった。守ってくれたのは母親だけだったのに。

ハレミは蒼の両肩に手を置いて、

「それは先払いの報酬金をミスミス海に沈めさせたくないから――」

「え？」

蒼は呆気にとられた。

「――そんな訳、少しはあるけど、こんなかわいい妹欲しかったの！」

ハレミは蒼に抱きついた。

蒼もゆっくりハレミの背中に腕をまわし、ハレミの胸に顔をうずめた。蒼の肩が上下に動き、きつく抱きしめる蒼が声を押殺して泣いている。ハレミにもすぐに伝わり、しばらく蒼を抱きしめていた。

次第にドア向こうの廊下が騒がしくなってきた。

「先代が残してくれた秘密兵器・ミドリムシを使う。機関室からデッキまでケーブルを引っ張る。手の空いている者は手伝え」

走り回るクルーに指示を出しているイノガリの声だった。

とうとう使うのね、あれを。今から準備するということは、まだ時間がかかる。デッキからの攻撃だけで時間稼げるのかしらと、ハレミは蒼を抱きしめつつ考えていた。ふと下を見ると蒼の周りに青い粉が落ちていたのにハレミは気づいた。

――これって。

デッキは、セリパラ号の行く末を占う攻防が続けられていた。セリパラ号の周辺を飛び回る戦闘機はだいぶ風の流れを読めるようになったのか、安定してセリパラ号を攻撃してくる。

セリパラ号の飛行速度はだんだん遅くなり、高度は下がっていく。それに加え、遠深黒海を離れて始める。荒れ狂うような風はおさまり、雲のない晴れ渡る青い海が眼下に広がり始めた。

薫はそれに気づいていた。これでは狙い撃ちされる。

と、そこにイノガリとクルーがケーブルを船内から引っばって来た。それはまるで消防用のホースと放水銃だ。

「すぐに撃てるか？」

薫はイノガリに聞いた。

「まだです。フル充填にはもう少しかかる」

「早くしないと、本当に沈んじまうな。なあ、イノガリ。遠深黒海から離れているが、指示したか？」

「いいえ、私は何も……」

と、イノガリがそう答えた時、空を飛ぶ鮮やかな羽の蝶が目に映った。それはすぐに蒼だとわかった。

「アイツ何をする気だ。なぜ外にいる。まだ弾が飛んでいるってのに」

風の流れをつかもうとしている蒼を目で追う薫。蒼は、黄色の粉をまき散らしながら、戦闘機へと近づいていく。体をくるくると回転させながら銃弾の雨を避ける。黄色い粉は戦闘機を一瞬包み込んだ。すると、静かに高度を下げて行き、二度と上がってくることはなかった。蒼はすぐに次の戦闘機へ向かって行く。

「一本取られたな。自分の呪いを武器に使うとは」

薫は笑った。

「しかし、これでは我々も巻き込まれてしまうのでは」

イノガリは背筋を凍らせた。

「大丈夫よ。セリパラ号の風上に出ないように言っているし、あの呪いはコントロールできるようになったから」

ハレミが堂々と胸を張って現れた。

「呪いのコントロール？」

イノガリが聞いた。

「ええ。どうやらあの鱗粉は、蒼ちゃんの状態や気分でその成分が変わるみたい。今は見ての通り黄色で、死の粉。マイナスの状態がそうさせる」

ハレミの説明の間にもまた一機の戦闘機が静かに姿を消した。

「それと、蒼ちゃんは私の妹になったから、よろしくね。船長」

ハレミはニヤリと、したり顔を薫に見せた。

「ハレミ。勝手に……」

『兵器ミドリムシの充填完了。繰り返す。兵器ミドリムシの充填完了』

アナウンスがデッキに響き渡った。

「イノガリ、デッキ後方だ」

薫はハレミをちらっと睨みつけ、ケーブルにつながれた銃器を持って船尾に向かった。

「蒼！ 下がっていいわ！」

ハレミはデッキから半身乗り出して叫んだ。蒼は後方にある戦闘機から離れ、セリパラ号に戻ってきた。羽から黄色の鱗粉は出ていない。

薫とイノガリ、クルー二人の四人で銃器をしっかり持つ。

「目標。不沈船、黒鉄の飛空艇！」

薫が言うと、銃器を持つ手にさらに力が入る。セリパラ号の飛行速度が落ちているため、黒鉄の飛空艇との距離は縮まっていた。薫はしっかり狙いを定め、発射スイッチに指を添えた。

「撃てーっ！」

銃口から放たれた緑色のレーザービームが一直線に黒鉄の飛空艇に向かって行く。そして、いとも簡単にレーザービームは黒鉄の装甲を貫いた。船の正面から後ろへ貫通している。

薫は銃口を上下に動かすと、一直線に伸びていたレーザービームは一つ波を作り、黒鉄の飛空艇を縦に割った。直後、レーザービームは音もなく消えた。

左右に割れた黒鉄の飛空艇は、一瞬の静寂の後、爆発し、爆煙を上げながら降下して行く。残された二機の小型戦闘機は、セリパラ号を離れて行き、どこかへ消えてしまった。

セリパラ号に歓声が上がった。

海へ道案内する黒鉄の飛空艇から昇る煙を見ているやつは誰もいない。クルーは喜び、声を上げ、抱き合うやつもいる。

「この空で自由に生きた方が彼女にとってはいいかもね。何に邪魔されることなく、きれいな羽を伸ばして飛べるんだから」

ハレミは薫の隣でセリパラ号の上を浮遊する蒼を見ていた。

「決めるのはお前じゃない」

薫が一言。

「まったく融通のきかない男。やっぱり子供ね」

「うるさい。依頼人が用意した船なのか、理由もわからず俺らは襲われた。しかし、不沈船と噂された船をあの子と俺らは落とした訳だ」

薫も蒼を見上げた。

「その理由ですが、おそらく戦闘で使用してみるという実戦訓練だったのかもしれませんが。ただ、荒れ狂う遠深黒海に来るとは思ってなかったはずでしょう」

イノガリも蒼を見た。

「セリカ・パラノイド空賊団を狙ったのが最大の敗因だ。多額の先払い報酬金は手元にある。今さら依頼もクソもねえ」

薫は肩から下げていた銃を宙に浮いている蒼に向けた。

「何してるの、薫ちゃん！」

ハレミは怒鳴った。けれど薫は銃を降ろさない。蒼も銃口を向けられていることはわかっていた。

「楯葉蒼。生きるも死ぬもここでは自由だ。お前は死にたいか。それとも生きたいか。選べ」

その薫の言葉で歓喜に包まれていたセリパラ号は嘘のように静まり返った。全員が蒼に注目した。

「……」

蒼の唇は震えている。

「……」

蒼は一生懸命、口を開けた。

「……わ、わたしは」

蒼は大きく息を吸い込んだ。

「わたしは生きたい。この空を飛んでいたい。私をこの空で飼って下さい！」

蒼の頬を涙が伝う。

「ふん。俺の指示と天候には逆らうんじゃねーぞ。いいな」

薫は銃を下げた。

「はい！」

そして蒼はやっと笑顔になった。

「あと私の指示もね、妹よ！」

ハレミは両手を振って言うと、すぐに薫が、

「何でだよ。船長の指示だけに従っていればいいんだよ」

と、言い返す。

「私はこの船の女頭よ！」

ハレミは自分の胸をポンと叩いてアピールした。

「もう知るか。おめーら、始めるぞ。歓迎の祭りを！」

薫がそう言うと、静かだったクルーが拳を握り空へ向けて応えた。

蒼は喜びを表現するようにセリパラ号の周りを優雅に舞ってみせた。青く光る粒子を散らせながら。

「おはよう！」

朝、そう言ってスライド式のドアを開けて病室に入ってきた花咲薫。Yシャツに白衣をまとった姿で薫は、ベッドの上でうつむいている牡丹に歩み寄る。牡丹は泣いて赤くなった目でチラリと薫を見た。泣き疲れているのか、何かの感情を表情でつくろうことはしない。現実を知ってショックだったに違いない。薫は心をしめつけられた。しかし、いつかこの時が来ると覚悟はしていた。

「牡丹さん。朝ごはんは一口も食べれなかったみたいだね」

牡丹は胸の前で抱いていた布団に顔をうずめた。また彼女は泣き出してしまうのだろうか。けれど、もう泣き続けても無意味だ。現実を知って現実逃避をしては、ここに来る以前と同じ場所、振り出しに戻るだけだ。そして、これを繰り返せば階層が一段ずつ増えていく自分の迷宮に、何度も足を踏み入れることになる。さらに抜け出すことが難しくなる。

ベッド脇の台の上にも置いてあるティッシュ箱。薫はその隣にある標本ケースを手にとった。いつもならガラス板がはめ込まれているが、今日はない。

「牡丹さんが最初の子をここに入れたとき、牡丹さんはこの子に何と言っていたか覚えていますか？」

牡丹は、薫が持っていた標本ケースを一瞬だけみてすぐに目をそらした。

「思い出したくありません。それを私に見せないで下さい。先生」

薫は肩で一つ息を吐いた。

「俺はその言葉を聞いて、牡丹さんはなんて優しい心を持っているんだろうと感じたよ。本当さ」

薫はゆっくりと話すと、牡丹は両手を耳に当ててしまった。

「思い出させないで下さい。今すぐにでも忘れたいんです」

「忘れてはダメだよ。今まで自分で気づくことができなかった自分なんだから」

薫がそういうと、牡丹はしっかり聞いていたようで左右に首を振った。

「ここに揚羽黄柚子を最初に入れた時、牡丹さんは『抜け殻になった体は私のそばで見守る。私の使命なんです、きっと。誰に言われた訳ではないけど、そんな気がしている』と言ったんだ。この標本ケースの中に入れた揚羽黄柚子に」

薫はケースの中を指差した。虫ピンで止められたティッシュペーパーを。それはただのティッシュペーパーを丸めて蝶の羽のように広げたものだった。

「今朝目が覚めて、手の中にいたのは夢の中で捕らえたはずの女の子ではなかった。蝶の羽も生えていないただのティッシュペーパー。標本ケースの中にいた女の子たちも皆、紙だった。驚かない方がおかしい」

牡丹は起き抜けに突きつけられた現実にショックで標本ケースを壁に投げつけた。ケースは壊れなかったが、ガラス板は砕け散った。すぐに看護師が駆けつけ、取り乱した牡丹を落ち着かせる光景が薫の頭の中に浮かんだ。

「なぜ、今日になって紙に見えるようになってしまったのか。君自身、ずっと蝶の女の子たちを見ていたはずなのに、見えなくなってしまった」

薫は牡丹に話しかけず、自問自答するように口にした。

「そんなことわかりません」

牡丹はぼろっと口に出した。

「これは牡丹さんの心の中からのメッセージと捉えることもできる。そんな気がしないかな？」

「現実を知れと？」

「俺はそうは思わない。牡丹さんの世界で何か次へ進むことが起こったと思う」

「次へ進むこと？」

牡丹は今日見た世界を頭の中で思い出す。思い当たる所がないのか牡丹は首を左右に振って、ため息をついた。

「病室で、高校生の俺と看護婦の牡丹さんの会話や行動。もしくは、薫少年の夢の話にヒントがあると思う」

薫がそういうと、牡丹は唇をきゅっとしめてもう一度頭の中で思い返そうとする。

「今、思い出さなくてもいいよ。ゆっくりでいいからね」

「あ、はい……」

牡丹は、パッと顔の緊張を緩めた。

「今まで牡丹さんの物語を聞いていると、やっぱり人の面倒を見てあげたい人なんだなって感じたよ」

「どの辺りがですか？」

「それを顕著に表しているのが、牡丹さんが看護師として登場していることだね。患者さんと親身になって面倒をみるだろ」

「はい。確かに」

牡丹は自分の看護師姿を思い浮かべた。薫少年の様子を伺う牡丹。

「面白いと思ったのは、薫少年だ。姿、形は俺なんだろうけど、中身は牡丹さんそのものだ。蝶の女の子をとらえてケースに入れるところは完全に今の牡丹さんと合致するするし」

「ですね。私もなんとなく自分なのかなって思っていました。今思うと笑っちゃいますよね」

「面倒見のいい牡丹さんは自分で自分の面倒を見てしまおうと考えたのかもしれない。病院にくる前までは、一人で全てを抱え込んでいたでしょ。体力、精神ともに限界を超えてしまい、倒れてしまったわけだけど」

「それが私の見た世界に投影されていたんですね」

「牡丹さんの心を見てくると、そう。自分で自分の面倒も見てしまえという一方で、牡丹さんは助け、救いを求めてもいるんだ」

「えっ、私が助けを求めている？」

牡丹は驚いて復唱した。夢の中で自分が助けを求めることなどしたろうかと、一瞬頭の中を巡らせた。

「たぶん、自分では気づくことはできない深い心の中にそれはあると思う」

薫がそう言うと、牡丹はふと下を向いた。自分の心の海に飛び込んでみた。海面は透き通っていて見渡すことはできるが、すぐ下は真っ暗でどこが底で、どのくらい深いのかもわからない。思い切って潜っても思うように体は沈まない。牡丹は息苦しくなって海中から顔を出した。

「具体的に夢の中のことでいえば、蝶の女の子たちの面倒を見切れなくなってしまったんだ。結果的には、牡丹さんを目覚めさせたんだと思う。臨海を突破したことで、ようやく牡丹さんは助け・救いを求めるようになった」

「私はそういう風に思ったことないと思います」

牡丹が言うと、薫は笑顔で頷いた。

「うん。俺もそうだと思う。では、牡丹さんの物語に話を移してみよう。深い心の中というのは、薫少年のいわゆる夢の中のこと。いつも蝶の女の子が出てくる世界だ」

「でも、そこには私は登場していませんよ」

「うん。さっき言ったけど、薫少年は今の牡丹さんの写し鏡。薫少年の見る夢も牡丹さんの世界なんだ。簡単に言うと、建物の一階が今の牡丹さんで、地下二階が看護師の牡丹さんと薫少年がいる病室。地下三階が薫少年の見る夢の世界。たとえ、牡丹さん自身が登場人物として登場していなくても、すべては牡丹さんの心を内包している」

「具体的にどういうことですか？」

牡丹は首をかしげる。薫はピン止めされていない一枚のティッシュペーパーを標本ケースから取り出した。それは今日、牡丹が起きた時に手に握っていたもの。

「これだよ」

薫はティッシュを牡丹に見せた。牡丹は一瞬目をそむけたが、あらためてそれに視線を向ける。

「ティッシュ……。それとも蝶の羽が生えた女の子？」

牡丹は半信半疑で答えた。

「そう、蝶の羽が生えた女の子。もう一人の牡丹さんだ」

「もう一人の私……」

牡丹はまじまじと薫の持つティッシュを見る。そのティッシュは寝間着姿の自分へと変化し、白い蝶の羽が花を咲かせるように開いた。薫の持つティッシュが牡丹の目にそう映った。

「物語の中で、蝶の女の子たちは薫少年と接触することで大きくも小さくも助けられたと思うんだ。どのお話も薫少年が出てくる。これって、蝶の女の子である牡丹さんが薫少年という助けを求めていたという風にとれる」

「先生を？」

「んー、俺ではないと思うな。夢の中だから薫少年は、やはり牡丹さんだ」

「そうですか？ どのお話も薫少年は女の子を導くような流れでした。昔の自分みたいでしたけど、薫少年と私は全然性格も違います」

「夢の中の薫少年は、今の牡丹さんの憧れ、理想像ではないだろうか。確証できないけどね」

「んー、そう言われるとそう思えるような気がします。薫少年のような人。でも違う気がします。誰もいない暗闇を照らす光だったかも……」

牡丹は真っ白の天井をボーッと見ていた。白い蝶の羽を生やした寝間着姿の牡丹に、揚羽黄
袖子、赤星稲穂、志染紅子、屋久島るみ、襷黒白絵、楯葉蒼が重なり、一点に向かって手を伸ば
している。その先には薫少年が「さあ、皆おいで」というように彼女らに手を差し伸べている。
薫少年の手を握るとぐっと引き寄せられ、その瞬間、蝶の羽は風に流される光の粒子となって消
えていった。

「どうして蝶の羽が生えていたんですか？ それにも何か意味がありますか？」

牡丹が聞くと、薫は少し困った顔をした。

「人は心の中にもう一人の自分がある。それはとてもデリケートなものだ。そう、蛹（さなぎ）
のようにずっと静かにしている。成長しないんだ。アクシデントがなければ一生蛹のまま。でも
蛹にはスイッチが仕掛けてある。そのスイッチというのが、蛹を羽化させるスイッチなんだ。そ
れを押すと、牡丹さんの物語に出てきた蝶の羽の女の子が生まれるんだ」

「スイッチを押してしまうと、私みたいになるんですね」

と、牡丹は落胆してしまった。

「一概には言い切れないけれどね。心に火薬が積もりたまっていて、ある時スイッチが入って火
薬に点火。そして、心が爆発する。そういったアクシデントがなければ、蝶にはならないし、心
が爆発することもない。でも、人である以上はアクシデントと背中合わせでいる。上手く回避で
きる人もいれば、そうでない人ももちろんいる。耐えきれず自らスイッチを押してしまう人。他
人に押されてしまう人。はたまた時限式の人。逃れられないこともある」

「それ、なんとなくわかります。経験しているからかもしれません」

牡丹は、薫の持つ標本ケースに自ら手を伸ばし、薫から受け取る。ガラス板はなく、直に自分
の作ったティッシュコレクションを見つめた。

「私、子供の頃は何かできずに困っている子がいたら助けていました。一緒に手伝ってあげる感
じで。先頭にたってどこかを目指すというより皆と一緒に完成や成功を目指すことが好きでした
。でも成長して行くに連れて、自分という壁にぶつかってしまうんです。進路や将来やりたい
こと、仕事、人生をどうやって歩いて行くのか。何も思いつくことはなく、私はつくづく自分
がないなって思っていました。高校まで周囲に上手く溶け込めていたんですが、大学生になるとそ
うもいきません。集団行動はしても、行きつくところは個人。自分でした。私には何もないのに、
誰かと居ようものなら、個人を演じるようになってました。他人を気にしながら、何者かの個人
をアピールする。最後は強迫観念にかられて動いてました。それもすぐに体は限界を超えてしま
いました。個人を演じなくてもいい世界がどこかにないかずっと考えを巡らせていた時、私は先
生の言っていたスイッチを押したんだと思います」

牡丹は少し間を空けた。

「……」

薫は何も言わず、相槌を打つだけだった。

「誰も誰にも言えない、理解されないものがある。でも皆、上手くそれと付き合えたり、解き
放つことができたり、何かの流れに乗れたりしている。それを私はできなかった。自分という箱
の中で私が腐っちゃった。わかっていたつもりだったのに……」

牡丹は肩の力を抜いた。全てを言い切ったように。

「牡丹さん。自分を責めない。牡丹さんの箱には、こんなに素敵な自分があるじゃない」

薫は牡丹が抱えている標本ケースを指差した。

「素敵な自分？」

「そう。スイッチを押して爆発して、蝶の羽が生えても、物語のように薫少年という導きの光が必ずある。牡丹さんはどの羽を生やしても大丈夫だってこと。スイッチを押した牡丹さんだからこそ、彼女を生み出し、そして解き放つことができる。解き放ち方はひとそれぞれ違っていい。むしろ、違ってないとおかしい。牡丹さんは牡丹さんでしかないんだから」

薫は少し興奮気味だった。

「よくわかりません。夜中にティッシュを丸めて蝶のように形作って、さらに夢まで作り上げるなんて……」

左右に首を振り、牡丹はケースの中を見つめるだけだった。

「牡丹さんの新しい一面だよ。素敵な世界じゃないか。今まで色んな人と関わってできた世界を無下にする必要はない。大事しておきなさい」

「……」

「そこで一つ。私から課題だ」

「課題？」

「うん。この素敵な分身たちを牡丹さん自身の力でもう少し広い場所に移してみなさい」

「……」

もう一度牡丹はケースを見つめた。

「これには模範回答はない。牡丹さんが自分で作り出す。それが答え。とりあえず、このケースよりは大きくないとダメだよ」

「……」

牡丹は嫌がる素振りは見せず、しかし頷くこともせず、ただケースの中のティッシュペーパーを見つめていた。具体的に頭の中でイメージを膨らませているのか、それとも課題をやるかやらないかを考えているのだろうか。薫には今、牡丹が何を考えているのかわからなかった。

蝶の女の子たちを通して少しでも自分という壁と向き合って欲しい。結果がどうなるかなんてまだわからない。ただ逃避世界に戻ってはダメだ。牡丹さんの世界は決して逃避世界ではない。これから作り出して行く現実世界……となればいい。

と、薫は思っていた。

「遅くなってしまったな。ギリギリだな」

雨の中、薫は傘をかぶり時計を確認した。賑やかな駅前を少し離れた所までやってくると、雑居ビルが立ち並ぶ。一方通行の道路に面したビルの一階はお店が並ぶ。コンビニやラーメン店、雑貨店等々。その一画に小さな画廊があった。入口横の壁に、画廊・セリカ・アートヤードと書かれたプレートが貼り付けられていた。

薫は入り口の軒先で傘を閉じた。ガラス張りの入口からは中が見え、何となくどんなものが展示されているのかがわかる。その入口には『四季野牡丹展・少女蝶々の箱』と題されたポスターが貼ってあった。それには牡丹ががむしゃらに作っていた作品の一つがメインイメージとして写っていた。

一週間前、セリカ・アートヤードを運営する知人から連絡を受けた。画廊が空くから誰か展示する人はいないかということだった。その期間だけずっと空いていて誰も入ってくれず困っていたらしく、閉めてしまうのはせつかくの機会ももたないとのこと。お金の面でということではないらしい。期日まで時間はほとんどなく、宣伝も十分できないから、画廊の費用は運営側が持ってくれた。

牡丹に課題を与えて一ヶ月半。最初のうちは悩んで集中できていなかったが、次第に他のことを忘れるくらい作業に没頭していた。素人目に見ても出来はいい方だと思って、牡丹を推す運びとなった。

画廊に入るとすぐに小さな受付があり、女性が「ゆっくりご覧下さい」と出迎えてくれた。画廊には誰も客はいない。静かなものだ。ただ、天使の羽を震わせるようなやわらかな歌声の入った音楽がこの空間を包み込んでいた。真っ白な壁が奥まで続き、左右の壁に沿って白い布をかぶった台が並んでいる。その上に牡丹の作品が置かれていた。

水槽のようなガラスでできた箱の中に、蝶の羽を生やした女の子がいた。「1. 揚羽黄柚子」と書かれたプレートが作品脇に置いてあった。薫はもう一度作品に目を戻す。

その作品は、下部四分の一くらいに校舎の屋上と階下一階分が厚紙で作られていた。屋上を囲う柵は串を均等に切って色を塗って作られていた。学生服姿の揚羽黄柚子は黄色の羽を背に広げ、宙を飛んでいるように下から棒で支えられ、静止していた。牡丹の世界の一端が表現されている。人物は紙粘土で形作り、顔の凹凸もしっかり出ている。肌が露出する部分は肌色の布が当てられ、服も布で仕立てられていた。髪の毛も似た毛の素材を使って表現され、人物は全体的にやわらかく優しい印象を受けた。羽は厚紙で型抜きされ色が塗られていた。

薫は隣に足を進めた。

「2. 赤星稻穂」と題された作品は、箱全体に枯れ木が何本も立てられ、その林の中に赤い羽を広げた少女が立っていた。学ランにスカート姿で刀を構えるその女の子は、勇ましくもあり美麗であった。

次へ進む薫。

「3. 志染紅子」は、箱に向かって左側が真っ白な空間になっていて、そこにはビデオテープ

を模した物がいくつも散乱している。右側は青い空間になっていて海の波が打ち寄せていた。その打ち寄せる波は、白い紙をくしゃくしゃにして細長く丸めて表現されている。紅子はその海へ飛び出すようにオレンジ色の小さな羽を羽ばたかせながら飛び立とうとしていた。

次は「4. 屋久島るみ」。

丘の上のように土が盛られ、これもまた枯れ木が数本立てられていた。夕陽の光に包まれているように背景はオレンジ色の紙で覆われている。

るみはTシャツ、短パン姿に青い羽を片羽だけ広げてこちらに手を伸ばしていた。

次の作品は屋久島るみの向かい、薫の背中側にあった。画廊の奥は関係者以外立ち入り禁止になっていて、順路としてはここで折り返す形になっている。

「5. 棲黑白絵」の作品は、いままでの作品と趣が異なり、箱の正面以外は黒い紙で覆われていて、白絵は箱の中央に浮いていた。白い羽は蜘蛛の巣にからまり、白絵の体は一角から伸びた細いプラスチック製の鎖に巻かれていた。また数本の鎖が下に落ちている。これは白絵から鎖が外れたことを表現しているのだろうと薫は思った。

「6. 楯葉蒼」は、見るからに空を飛んでいる様だった。下面には雲を模した綿が敷かれ、青い背景の空に向かって手を広げて舞う蒼がいた。

薫はここで終わりかと思っていたが、まだ先に二つ作品があった。次へ足を進めてみると、「7. 四季野牡丹（未完成）」とあった。

箱の中央で、真っ白の人物が真っ白の羽を生やし、膝を抱えて座っているだけだった。その人物は紙粘土が乾いた状態のままで、色も塗られていない。作品が未完成といっているのか。それとも牡丹自身がまだ未完成であることを伝えているのか、とも受け取ることもできる。薫は面白いなと思って微笑んだ。

そして最後の作品は、「0. 少女蝶々の箱」というタイトルの見慣れた標本ケースがそこには置かれていた。それにはちゃんとガラス板がはめ込まれていた。蝶を模したティッシュペーパーが虫ピンで止められている。作品の元になった牡丹の心が飾られていたことに薫は驚いた。まさかこれを展示するとは……。これは牡丹が隠しておきたいものだろうと思っていたのに……。

「先生！ 来ないのかと思っちゃいましたよ」

画廊の奥から出てきた牡丹が声をかけてきた。

「ごめんね。予定が押しちゃって。それにしても素晴らしい展示になったね」

「本当ですか？」

牡丹は嬉しそうに笑った。こんな笑顔を見るのは彼女と出会って以来初めてではないだろうか。薫も嬉しくなった。

「驚いたよ。これがここに置かれていて」

と、薫は標本ケースを指差した。

「私の原点でもあるし、少女蝶々はこの箱から広い所へ移動したという意味も込めて置きました」

「牡丹さんの答えをこういう素晴らしい形で見れて良かったよ」

「ふっ。私もです」

牡丹はまた笑顔を薫に見せた。

「先生。ちょっと不思議なことがあるんです。これ、見て下さい」

牡丹はそう言って、標本ケースの隣に広げて置いてあったノートを手を取った。

「見て下さったお客さんのメッセージノートなんですが」

薫はこのノートの何が不思議なのかわからなかった。

「一つずつメッセージを見ていって下さい」

困惑する薫に牡丹はノートを手渡した。薫は一ページずつメッセージを読んでいく。

不思議な世界。五番の黒の箱が怖かった。また展示会があれば見に来たいなどそれほど数は多くないが、メッセージが書かれていた。特に不思議と思えることは書かれていない。薫はページをめくっていくと、牡丹の言っていることがそこでやっとわかった。正直、目を疑った。

「これは……」

薫の背筋が凍った。

——こんな醜い私を愛してくれてありがとう。あなたに話せてよかった。

揚羽黄柚子——

——うみはひろいな、大きいな。しょっぱいな。ざばーんってなみがうみなんだね。おにいちゃん。

しじみもみこ——

——落ち込んだ時、壁にぶつかった時、刻印された蝶の羽を見て、あなたを思い浮かべます。また必ず約束の地で会いましょう。

屋久島るみ——

——プライベート・オンリーの時みたいに楽しませてもらっています。いつもお手紙ありがとうございます。また、書きますね。

棲黒白絵——

——もっと色んな空を飛んでみたいので、いろんなところに連れて行って下さい。船長。

楯葉蒼——

「不思議ですよ。少女たちの名前が書いてあるの」

観覧者としての名前があった。筆跡は明らかに女性の字で、同じ人が書いたような字体ではなかった。特に志染紅子の字は、字を習い始めたような不安定で子供らしい字だった。そして彼女らのメッセージはどれも、牡丹の夢物語と酷似している。というより、むしろその先があるようにも思える。

「これは、みんな実在していて、見に来てくれたってことですよね。でも、赤星稲穂だけないってことはやっぱり……」

もし、牡丹が自分で書いていないのであれば、そういうことになるだろう。

実在しているならば、牡丹の夢物語は心からのメッセージではなく、牡丹の確固たる体験談ということになるだろう。今までの判断は何の意味も成さない。

仮に少女蝶々を捕まえる力が牡丹さんにあったとすれば、この世界と異世界をつなぐ力を持っていたと。その力は、魔法か。異世界へ行くワープゲートが見えるのだろうか。特別な扉をくぐれば行き交うこともできるのか。

狂いなく闇の中で救いを求める叫びが聞こえていたに違いない。響き合う叫びが蝶の羽を輝かせてお互いをつないだ。六匹の蝶を救ったことで、持ち得ていた魔力がなくなった。使い切ってしまった。それが牡丹さんの臨界点だったのかもしれない。ただ、この魔力は回復するのだろうか。もし、回復したとしたら、牡丹さんはまた同じことを繰り返して苦しむだろう。そうならないで欲しいと願う。

どうであれ、牡丹さんは別次元を飛び回り、闇を彷徨い困っている人を助けていたようだ。昔も今も牡丹さんは変わっていない。人の心はどこかでつながっているのだろう。きっと彼女たちの感謝の念がこのノートに乗り移ったに違いない。

今回のようにあの世界を具現化し、自分の中で整理がついてしまったとなれば、異世界をつなぐ力は消えただろう。退院したことには嬉しく思うが、もう少しその現象を調べてみたいと思う自分もここにいる。

終わり

少女蝶々の箱

<http://p.booklog.jp/book/61016>

著者：水島一輝

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mizu-c/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61016>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61016>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ